

弥永原 9

— 弥永原遺跡第 12・13 次調査 —

2019

福岡市教育委員会

弥永原 9

— 弥永原遺跡第 12・13 次調査 —



遺跡略号 YNB-12・YNB-13

調査番号 1534・1628

2019

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれを物語る多くの埋蔵文化財が存在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は宅地造成工事に伴い、南区日佐3丁目で実施した弥永原遺跡の第12次・13次調査の報告です。両調査地点では、弥生時代前期の貯蔵穴と墳墓が複数基確認されました。本成果は当該地域の歴史解明だけでなく、弥生時代の墓制を考える上でも大変貴重な資料になります。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって多大なご理解とご協力をいただきました土地所有者様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成27年12月7日から平成28年1月6日まで南区曰佐3丁目で実施した弥永原遺跡第12次調査、および平成28年9月26日から12月6日まで南区曰佐3丁目で実施した弥永原遺跡第13次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、甕棺墓をST、土坑墓をSR、貯蔵穴をSU、不明遺構をSX、柱穴状遺構をSPとそれぞれ記号化し、12次調査・13次調査ともに01から通して番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した12次調査の遺物実測は元田晃子・朝岡俊也が行い、遺構実測、遺構写真撮影、遺物写真撮影、製図、執筆は朝岡が行った。
5. 本書に掲載した13次調査の遺構実測、遺物実測、遺構写真撮影、遺物写真撮影、製図、執筆は中尾祐太が行った。
6. 本書に掲載する挿図、図版は通し番号とするが、遺物番号については各調査報告ごとにそれぞれ1から番号を付した。
7. 本書の編集は朝岡の協力のもと中尾が行った。
8. 本書に係る記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1534	遺跡略号	YNB-12
調査地	福岡市南区曰佐三丁目126-1	分布地図図幅名	026
申請地面積	1,002m ²	開発面積	110m ²
調査実施面積	81m ²	事前審査番号	27-2-722
調査期間	平成27年12月7日～平成28年1月6日		

調査番号	1628	遺跡略号	YNB-13
調査地	福岡市南区曰佐三丁目126-1	分布地図図幅名	026
申請地面積	1,002m ²	開発面積	360m ²
調査実施面積	338m ²	事前審査番号	27-2-459
調査期間	平成28年9月26日～平成28年12月6日		

本文目次

I	はじめに	1
1.	12次調査の調査にいたる経緯・調査の組織	1
2.	13次調査の調査にいたる経緯・調査の組織	2
3.	遺跡の立地と歴史的環境	3
II	12次調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	遺構と遺物	7
(1)	土坑墓	7
(2)	貯蔵穴	13
(3)	その他の出土遺物	14
3.	小結	14
III	13次調査の記録	19
1.	調査の概要	19
2.	遺構と遺物	19
(1)	甕棺墓	19
(2)	土坑墓	25
(3)	貯蔵穴	26
(4)	不明遺構	30
(5)	その他の出土遺物	30
3.	小結	30
IV	まとめ	38

挿図目次

Fig1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
Fig2	弥永原遺跡各調査地点位置図 (1/5,000)	5
Fig3	弥永原遺跡第12次調査地点・第13次調査地点位置図 (1/1,000)	6
Fig4	第12次調査区全体図 (1/100)	7
Fig5	土坑墓1 (1/30)	8
Fig6	土坑墓2 (1/30)	9
Fig7	土坑墓3 (1/30)	10
Fig8	貯蔵穴 (1/60)	11
Fig9	SU04出土土器 (1/3)	12
Fig10	SU04出土土器 (1/3)	13
Fig11	SU30出土遺物 (1/3)	14
Fig12	SU30下層出土遺物 (1/3)	15

Fig13 その他の出土遺物 (1/3) • (1/1)	16
Fig14 弥永原遺跡第13次調査地点遺構配置図 (1/150)	20
Fig15 ST02 実測図 (1/20) および出土甕棺実測図 (1/8)	21
Fig16 ST03 実測図 (1/20) および出土甕棺実測図 (1/8)	22
Fig17 ST04 実測図 (1/20)	22
Fig18 ST04 出土甕棺実測図 (1/8)	23
Fig19 ST05・ST09 実測図 (1/20) および ST09 出土甕棺実測図 (1/3)	24
Fig20 SR01・SR06 実測図 (1/30)	25
Fig21 SU07 実測図 (1/60)	26
Fig22 SU07 出土遺物実測図 1 (1/3)	27
Fig23 SU07 出土遺物実測図 2 (1/3)	28
Fig24 SU08 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig25 SX10 実測図 (1/40)	30
Fig26 SX10 出土遺物実測図およびその他の出土遺物実測図 (1/3)	31
Fig27 11次調査地点・12次調査地点・13次調査地点遺構配置図 (1/500)	39

図版目次

12次調査

- | | | |
|------------------------|--------------------|-----------------|
| PL1 (1) 全景 (西より) | (2) 調査区状況 (北西より) | (3) SR05 (東より) |
| (4) SR09 (東より) | (5) SR09 土層 (南東より) | |
| PL2 (1) SR11 土層 (北西より) | (2) SR12 (南東より) | (3) SR27 (東より) |
| (4) 北東側土壤墓群 (南東より) | (5) SU04 (西より) | (6) SU04 遺物出土状況 |
| (7) SU30 断ち割り (北西より) | (8) SU30 内土坑 | |

13次調査

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| PL3 (1) 調査第1区 (南側) 全景 (北東から) | (2) 調査第2区全景 (西から) |
| PL4 (1) ST02 検出状況 (東から) | (2) ST02 甕棺底部除去後 (東から) |
| (3) ST02 墓壙完掘状況 (東から) | |
| PL5 (1) ST04 検出状況 (北から) | (2) ST05 検出状況 (西から) |
| (3) ST09 検出状況 (西から) | |
| PL6 (1) SR01 完掘状況 (西から) | (2) SR06 完掘状況 (北西から) |
| (3) SU07・08 半裁状況 (北東から) | |
| PL7 (1) ST02 甕棺 (1) | (2) ST04 上甕 (3) |
| PL8 (1) SU07 出土遺物 (8) | (2) SU07 出土遺物 (9) |
| (3) SU07 出土遺物 (10) | (4) SU07 出土遺物 (12) |
| (5) SU07 出土遺物 (13) | (6) SU07 出土遺物 (15) |
| (7) SX10 出土遺物 (26) | (8) SX10 出土遺物 (27) |

I はじめに

1. 12次調査の調査にいたる経緯・調査の組織

調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市南区曰佐3丁目126-1における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成27年11月2日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財審査課事前審査係（現・埋蔵文化財課事前審査係）は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である弥永原遺跡に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下30cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、切土部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成27年12月4日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年12月7日から発掘調査を、平成30年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成27年度・資料整理：平成30年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課（現・文化財活用部埋蔵文化財課）課長 常松 幹雄（27年度）
課長 大庭 康時（30年度）
同調査第2係長 榎本 義嗣（27年度）
大塚 紀宣（30年度）

調査庶務：埋蔵文化財審査課管理係
係長 大塚 紀宣（27年度）
同係 川村 啓子（27年度）
文化財活用課
課長 松本 真人（30年度）
同管理調整係長 藤 克己（30年度）
同係 松原加奈枝（30年度）

事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係（現・埋蔵文化財課事前審査係）係長 佐藤 一郎（27年度）
本田浩二郎（30年度）
同主任文化財主事 池田 祐司（27年度）
田上勇一郎（30年度）
同係文化財主事 大森真衣子（27年度）
中尾 祐太（30年度）
朝岡 俊也（30年度）

調査担当：埋蔵文化財調査課調査第2係
（現・埋蔵文化財課事前審査係）
文化財主事 朝岡 俊也

発掘調査：木藤勝子、池静子、浅井伸一、松丸敏子、中村敬子、石井純子、吉野一憲、樋口知徳

整理作業：執行恭子、中間千衣子、萩尾朱美、原周生、森藤博文

2. 13次調査の調査にいたる経緯・調査の組織

調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市南区曰佐3丁目126-1における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成27年8月7日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財審査課事前審査係（現・埋蔵文化財課事前審査係）は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である弥永原遺跡に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下15cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、切土部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成28年9月17日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年9月26日から発掘調査を、平成30年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成28年度・資料整理：平成30年度）

調査総括：文化財部埋蔵文化財課（現・文化財活用部埋蔵文化財課）課長 常松 幹雄（28年度）

課長 大庭 康時（30年度）

同調査第2係長 加藤 隆也（28年度）

大塚 紀宜（30年度）

調査庶務：埋蔵文化財課管理係 係長 大塚 紀宜（28年度）

同係 横田 忍（28年度）

文化財活用課 課長 松本 真人（30年度）

同管理調整係長 藤 克己（30年度）

同係 松原加奈枝（30年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係 係長 佐藤 一郎（28年度）

本田浩二郎（30年度）

同主任文化財主事 池田 祐司（28年度）

田上勇一郎（30年度）

同係文化財主事 大森真衣子（28年度）

中尾 祐太（30年度）

朝岡 俊也（30年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第2係（現・同課事前審査係） 文化財主事 中尾 祐太

発掘調査：唐島栄子、桑原美津子、村山巳代子、中村桂子、棄野孝子、安東昌信、上野照明、鷺崎哲夫、樋口知徳、早田有輝子

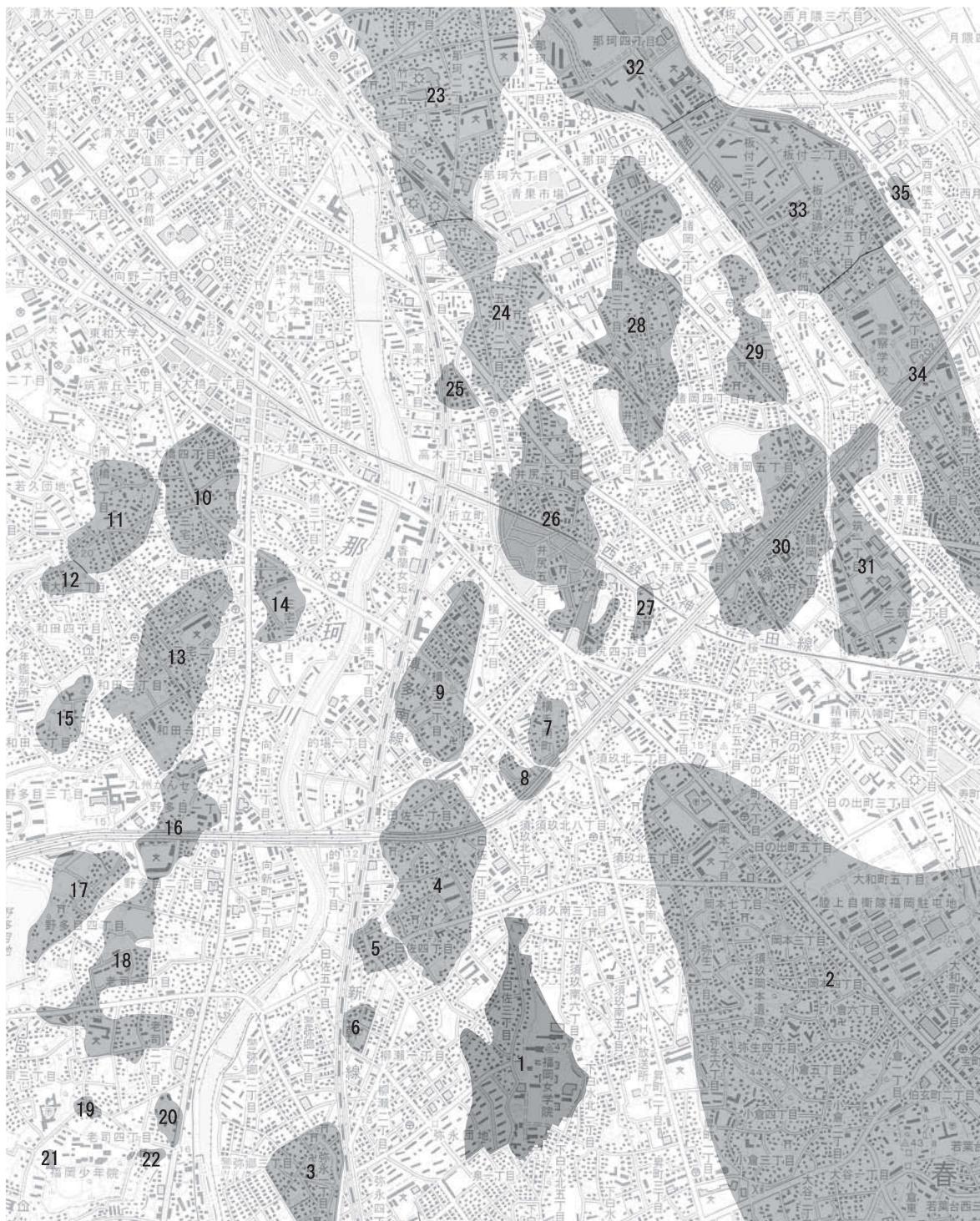
整理作業：樋口三恵子、花田友美子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

弥永原遺跡が位置する福岡平野は北側を博多湾に限られ、東側を三郡山地からのびる丘陵性山地、南西を脊振山地、および脊振山地から派生した丘陵によって画された低地の小平野である。平野内には宝満山に発し北流する御笠川、脊振山系に発し北流する那珂川がそれぞれ博多湾に注ぎ込んでおり、両河川およびこれらから派生する中小河川の開析作用によって形成された段丘面が島状に断続的に連なる。一帯は花崗岩風化土層を基盤としており、その上に堆積した通称鳥栖ローム層および八女粘土層と呼称される Aso-4 火碎流堆積物から成る台地である。それぞれの台地上には、比恵・那珂遺跡群、五十川遺跡、井尻 B 遺跡などの遺跡が所在する。

弥永原遺跡は上記遺跡のうち市域の最南端部に位置しており、谷を隔てた東側には「奴国」の中核域として機能した須玖遺跡群が位置する。弥永原遺跡は春日市須玖から下白水にかけて延びる丘陵上に位置する。丘陵はほぼ南北方向に延び、南北約 2000m、東西約 500m の規模をもつ。旧地形をみると標高約 30m を測る南端付近が最も高く、北へ向かい緩やかに高度を下げ、本報告書に記載する 12 次・13 次調査地点、及びこれらに隣接する 11 次調査地点が位置する丘陵の先端の標高は約 20m 前後で、以北の沖積地へとさらに傾斜していく。遺跡には北から狭い谷が入り込み、これにより北部は東西に分かれ、地形的にみれば東が 2m ほど高い。両丘陵に遺跡が所在することから、かつては西側を「弥永原遺跡」、東側を「曰佐原遺跡」とし、曰佐原遺跡=墓域、弥永原遺跡=集落として扱われていたが、現在は両者を弥永原遺跡として括りにまとめている。

弥永原遺跡における調査次数は徐々に増加してはいるものの、個々の調査要因には狭小なものも多く、遺跡の全容については未だ不鮮明である。したがって、ここでは既往の調査成果をまとめつつ遺跡を概観したい。1 次調査は曰佐遺跡の発見となった調査である。福岡女学院建設に伴う造成工事中に内行花文鏡が出土したことにより福岡県・九州大学によって緊急調査が実施され、丘陵尾根線上を中心に箱式石棺墓・石蓋土坑墓・甕棺墓からなる弥生時代後期の墳墓群と弥生時代中期の甕棺墓群が確認された。一部には副葬品を有する。2 次調査も福岡県・九州大学によって実施され、弥生時代後期の陸橋をもつ環濠が確認された。初めて福岡市を主体として実施された 3 次調査は 2 次調査と重複しており、先述した環濠の他、これとは異なる弥生時代後期前後の V 字状の溝や竪穴住居も確認されている。4 次調査では攪乱により遺構の残存状況は不良ではあったが、弥生時代後期の溝や古墳時代後期の竪穴住居が検出されている。5 次調査では弥生時代後期の集落の一部及び古墳時代～古代の溝を確認。福岡女学院内、1 次調査の南東部で実施された 6 次調査では甕棺墓・土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓が多数検出されている。7 次調査では東西方向にのびる溝が確認され、中期後半～古墳時代前期にかけての遺物が多く出土した。8 次調査は部分的な調査ではあったが、弥生時代中期後半～古墳時代初頭前後を中心とする集落の一端を確認。9 次調査は全体的に削平されていたが、竪穴住居と土坑墓が検出されており、弥生時代終末期前後のものと推定されている。10 次調査では時期が異なる溝が複数検出されており、うち古墳時代前期・後期・古代の溝は同方位に掘削されている。丘陵裾にあたるため、集落の外縁を示すものとされている。11 次調査では弥生時代前期後半の貯蔵穴群、弥生時代前期後半～後期にいたる各種の墓群、弥生時代中期後半～後期の竪穴住居、および古墳時代初頭の墳丘墓・円墳と多岐にわたる遺構を検出。11 次調査地点は、今次報告の 12 次・13 次調査に接しており、3 地点の調査成果は個々の成果のみに依るのではなく、一連のものとして扱う必要がある。実際、12 次調査・13 次調査でも貯蔵穴群および甕棺墓、土坑墓からなる墓群が検出されている。



1. 弥永原遺跡
2. 須玖遺跡群
3. 警弥郷 A 遺跡
4. 曰佐遺跡
5. 上曰佐遺跡
6. 高椋遺跡
7. 寺島遺跡
8. 笠抜遺跡
9. 横手遺跡
10. 大橋 E 遺跡
11. 三宅遺跡群
12. 和田藏池遺跡
13. 三宅 B 遺跡
14. 三宅 C 遺跡
15. 和田 A 遺跡
16. 野多目 A 遺跡
17. 野多目 B 遺跡
18. 野多目 C 遺跡
19. 老司 A 遺跡
20. 老司 B 遺跡
21. 老司古墳
22. 老松神社古墳群
23. 那珂遺跡群
24. 五十川遺跡
25. 井尻 A 遺跡
26. 井尻 B 遺跡
27. 井尻 C 遺跡
28. 諸岡 A 遺跡
29. 諸岡 B 遺跡
30. 笹原遺跡
31. 三築遺跡
32. 板付遺跡
33. 高畠遺跡
34. 麦野 A 遺跡
35. 板付東遺跡

Fig1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

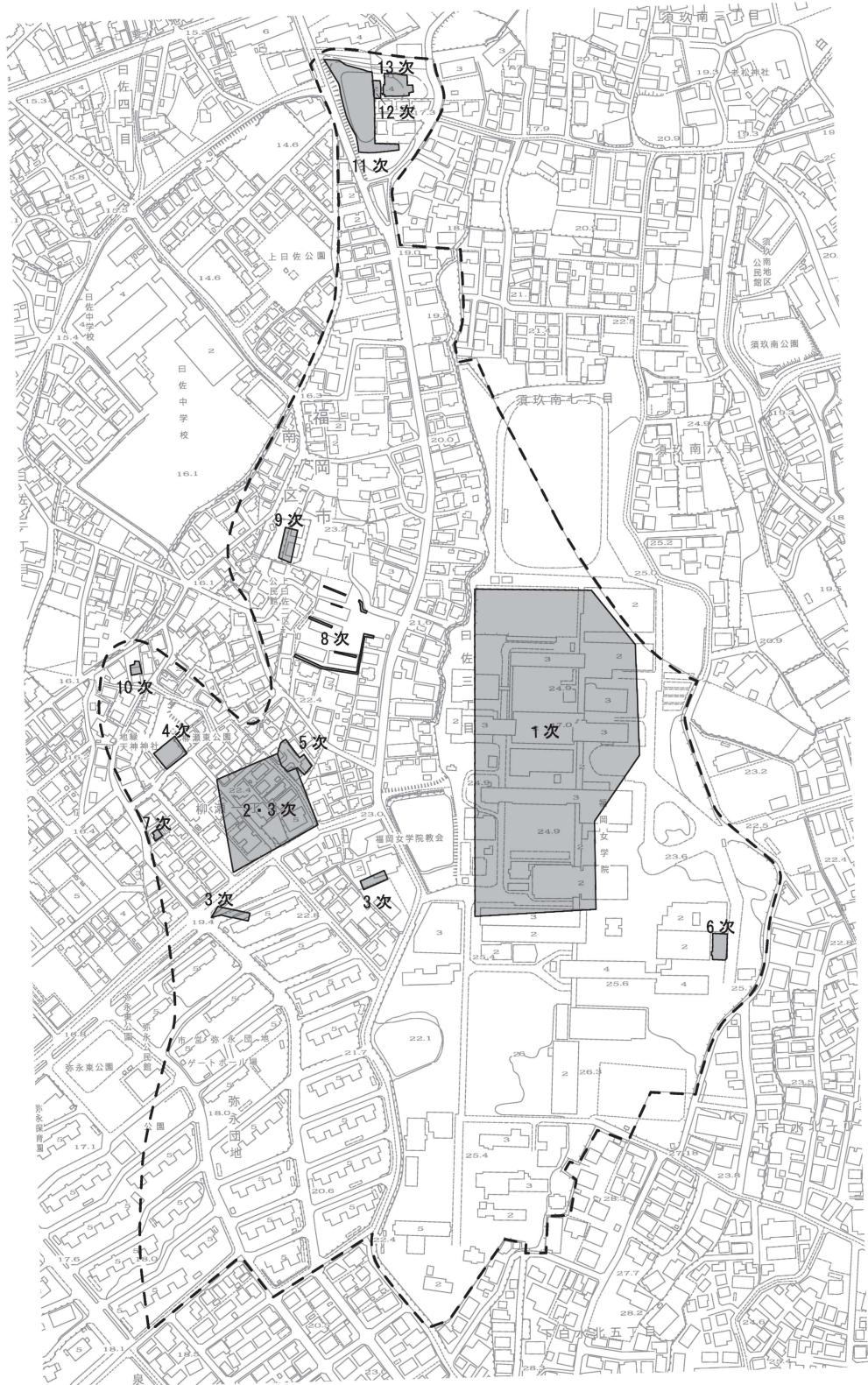


Fig2 弥永原遺跡各調査地点位置図（1/5,000）

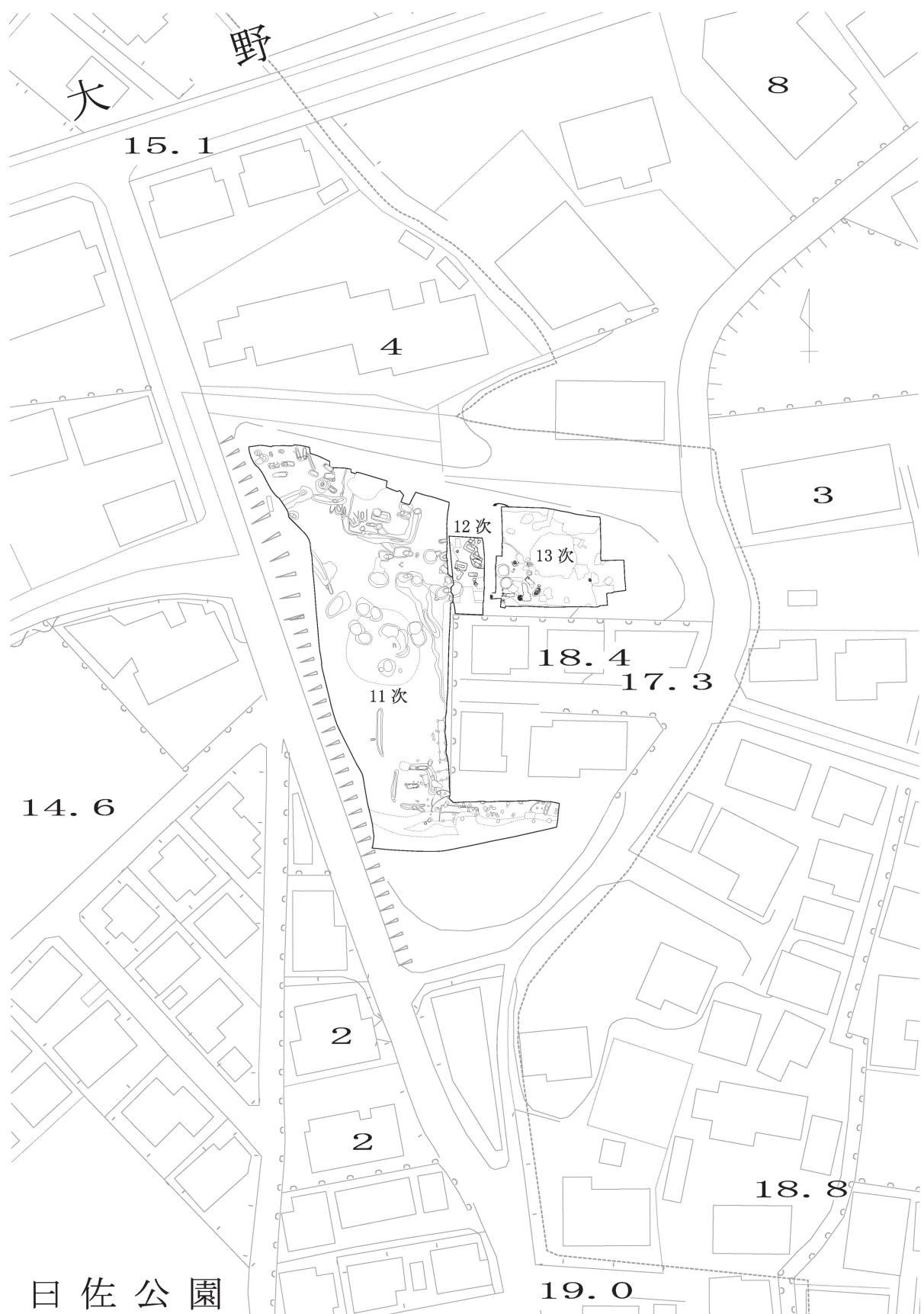


Fig3 弥永原遺跡第12次調査地点・第13次調査地点位置図 (1/1,000)

II 12次調査の記録

1. 調査の概要

12次調査区は11次調査区と13次調査区の間に位置する。11次調査区はすでに切り下げが終わっていたが、13次調査区を含む東側を広く切り下げるのに先立ち、崖面状の11次調査区との境の傾斜を緩やかにするための切土工事を行うとのことで申請があった。確認調査では先行切土範囲の南側において、G L -30cmで遺跡の残存が確認され、その範囲で発掘調査を行うことになった。本調査区の調査面積は81m²である。遺構面の標高は高いところで20.4mを測り、北に向かって下る。地山は花崗岩バイラン土。調査中、廃土は全て11次調査側に置いた（崖面状になっている下に投げ捨てた）。

検出した遺構は時期不明の土坑墓が11基、弥生時代前期末の貯蔵穴が2基、柱穴数基である。遺物は弥生土器などパンケース4箱分出土した。

2. 遺構と遺物

(1) 土坑墓

土坑墓は11基検出した。遺物が出土せず、時期は不明であるが、貯蔵穴を切るために、貯蔵穴よりは新しい。周辺の墓域の広がりから弥生時代中期～古墳時代前期であろう。

SR05

長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。整った方形を呈し、東側が深さ0.4mと一段深い。土層では床面から5cm程浮いて面的にきめの細かい黒色土が入り、落ち込んだ木蓋もしくは底板の痕跡である可能性が高い。

SR06

図面上は長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.15mを測るが、SU30と切り合うため、掘方は不明確。

SR09

上段で長さ2.1m、幅1.4m、深さ0.4m、下段で長さ1.3m、幅0.4m、深さ0.9mを測る方形二段掘りの土坑墓。土層に木蓋が落ちた痕跡があり、1段目床面に薄く粘土を貼る部分もあることから、2段目上端に木蓋を置いたと考えられる。2段目は東側がやや幅広く、西側は壁面がややオーバーハングする。2段目の壁面及び床面に薄く茶色粘土が張り付いていた。1段目床面の粘土が流れたものか。

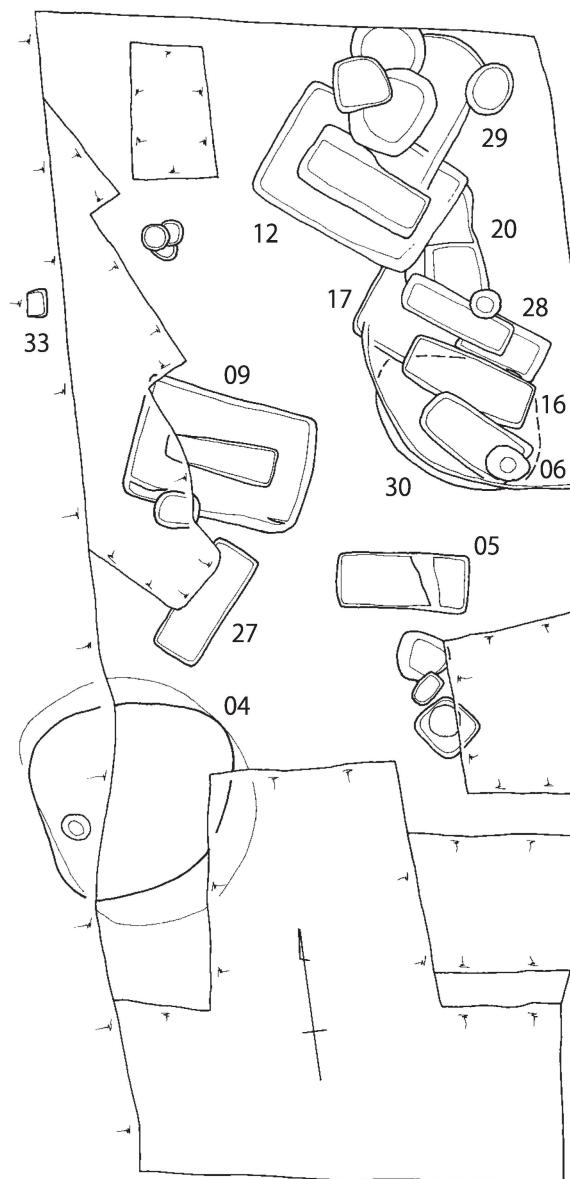


Fig4 第12次 調査区全体図 (1/100)

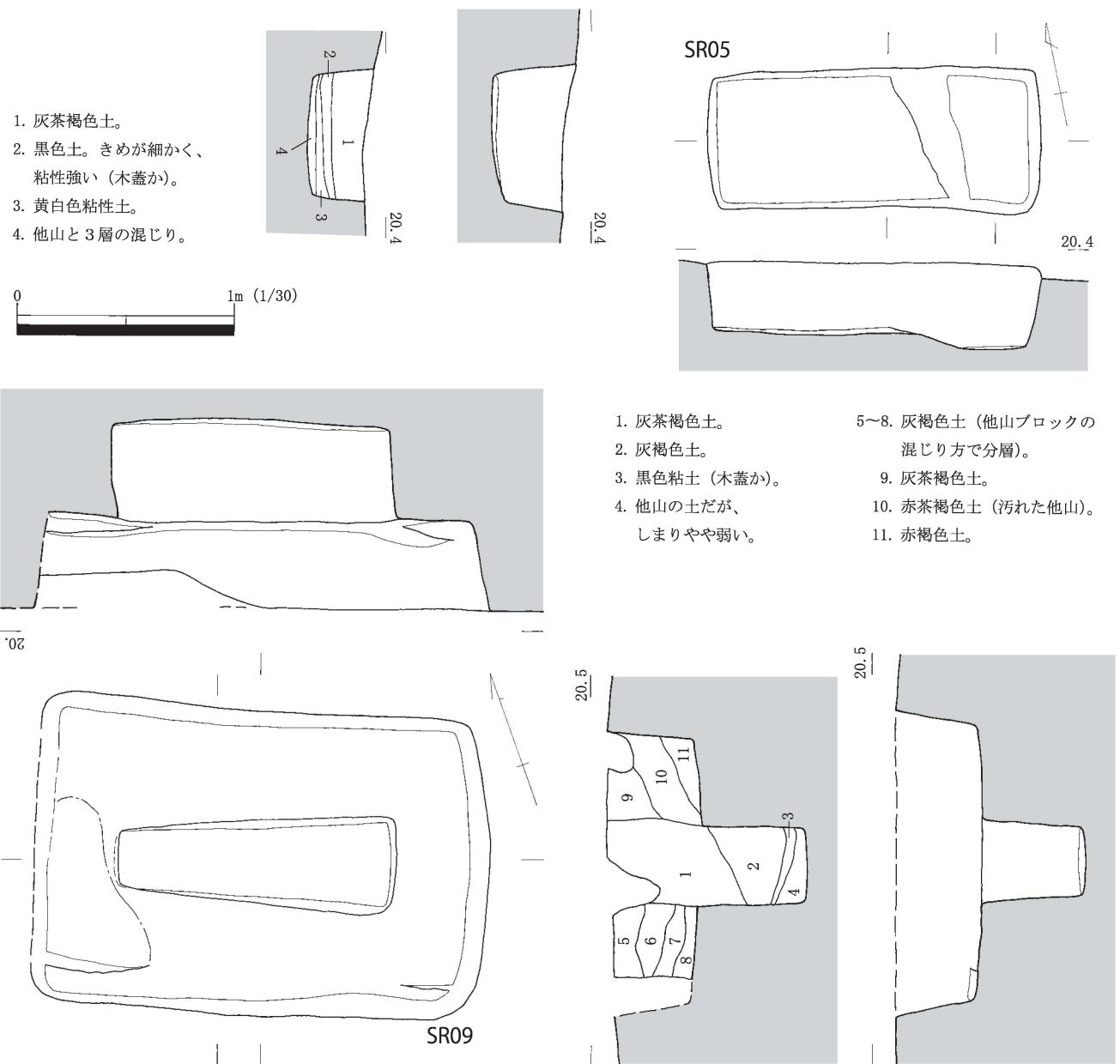


Fig5 土坑墓 1 (1/30)

SR12

上段で長さ2.1m、幅1.5m、深さ0.4m、下段で長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.9mを測る方形二段掘りの土坑墓。
SR09 同様、土層に木蓋が落ちた痕跡がみられる。2段目西側の上端がやや乱れているが、これは壁面が崩壊した結果であろう。

SR16

長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.1mを測るが、SU30と切り合うため、掘方のラインや深さは不明確。SR17を切る。

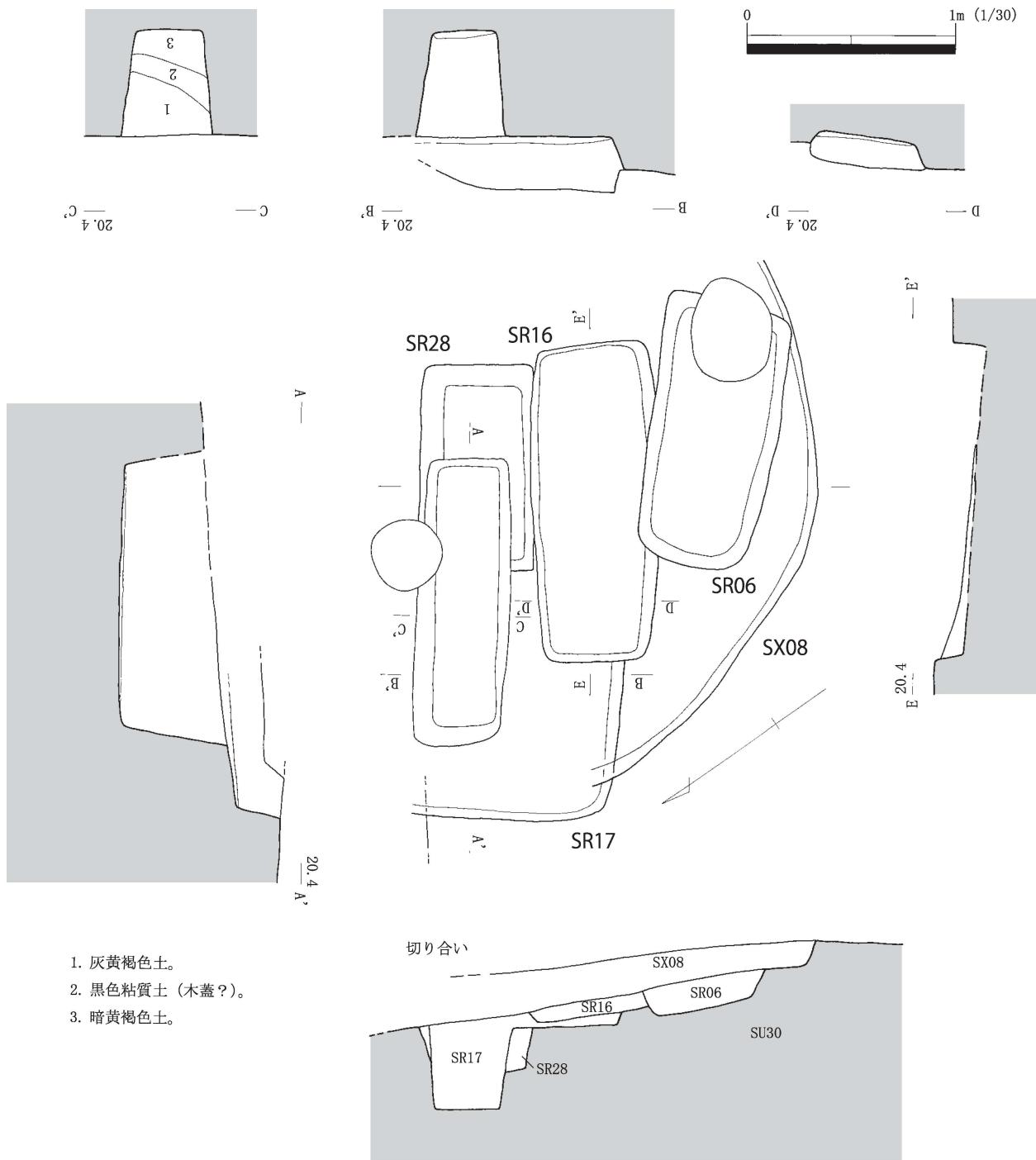


Fig5 土坑墓 2 (1/30)

SR17

下段で長さ 1.4m、幅 0.45m、深さ 1.3m を測る方形二段掘りの土坑墓。上段は片側が削平され規模は不明だが、下段掘方の中心が上段の中心とすると、長さ 2.0m、幅 1.5m 程とみられる。SR09・12 同様、土層に木蓋が落ちた痕跡がみられる。

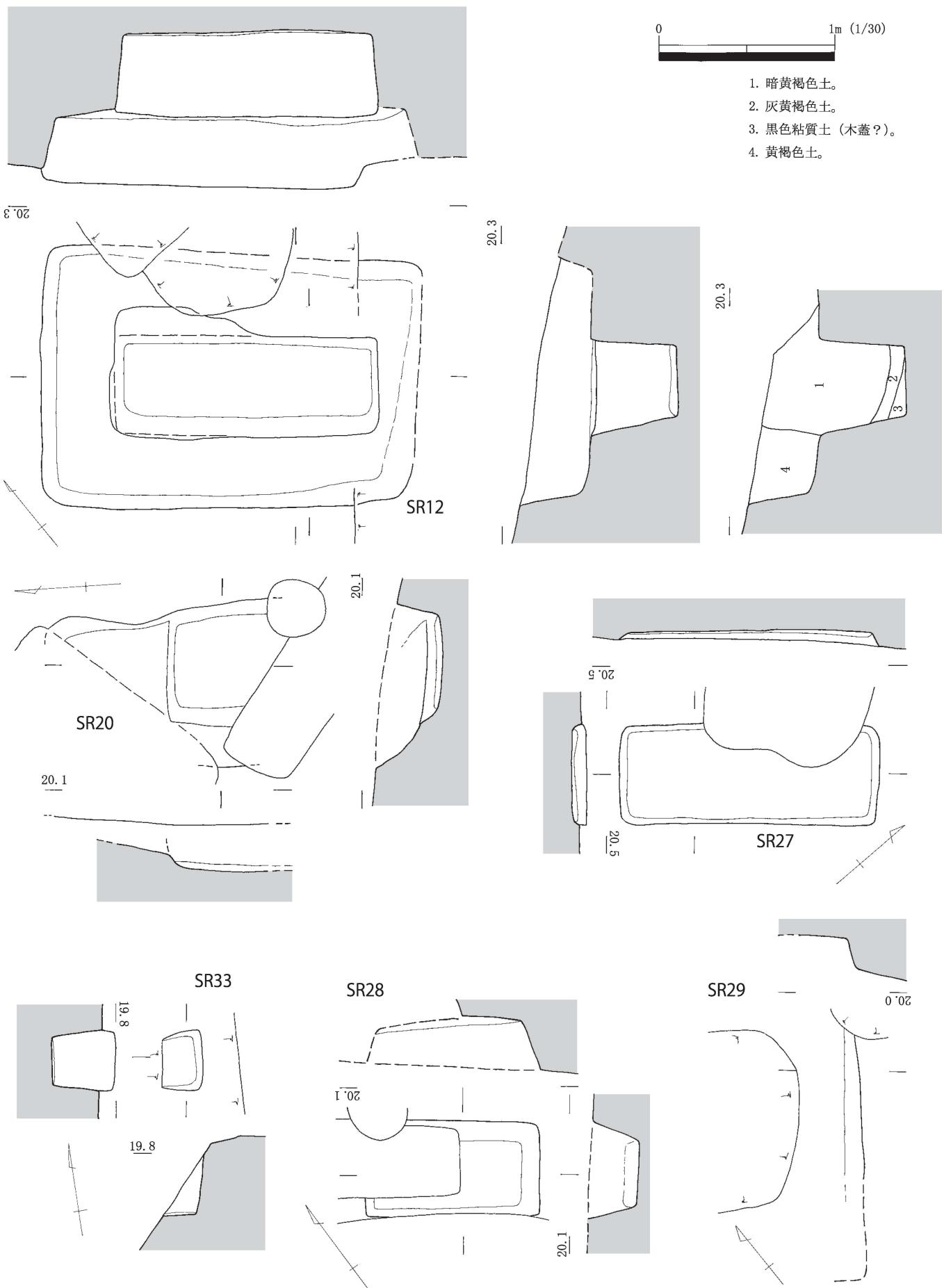


Fig7 土坑墓 3 (1/30)

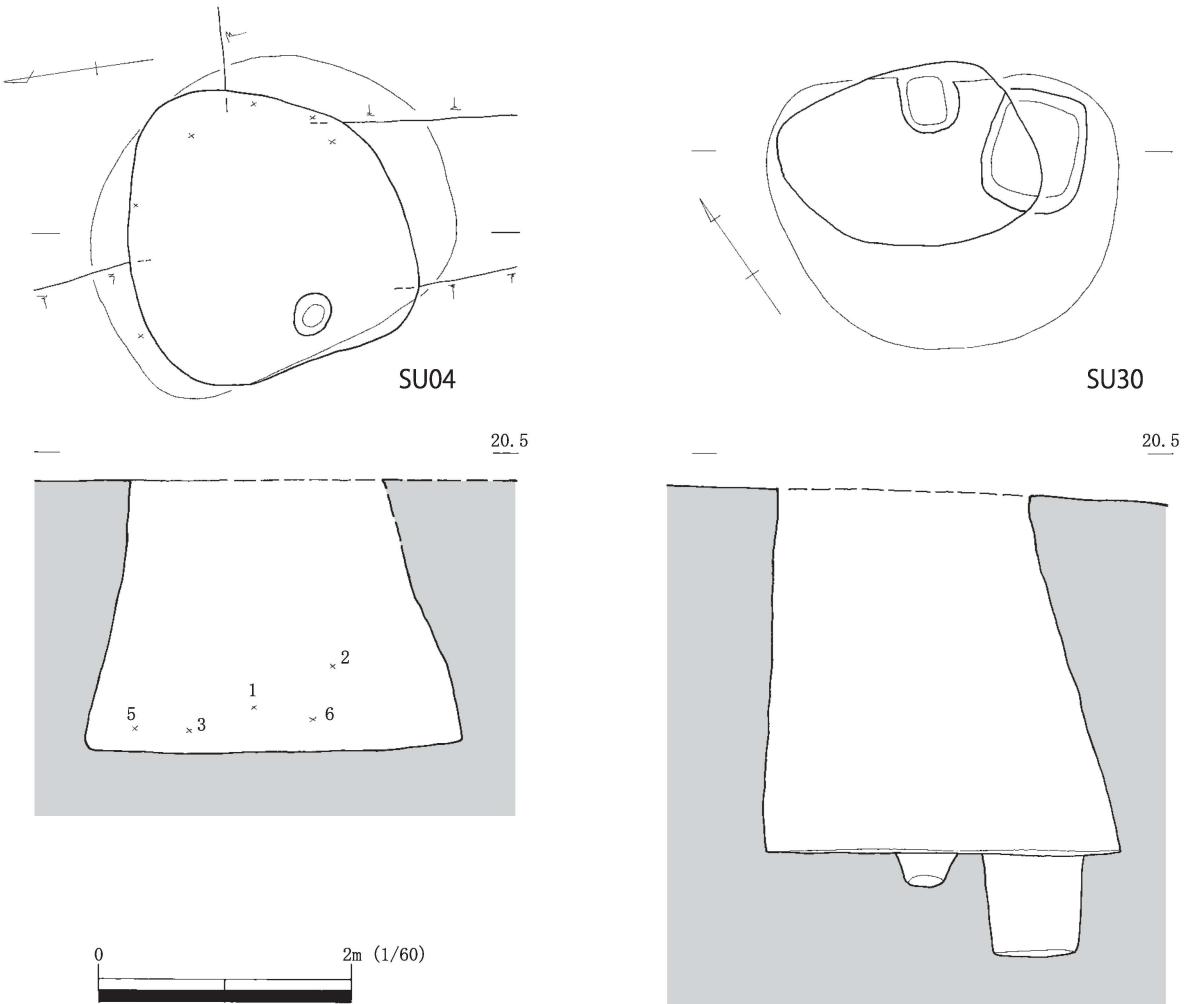


Fig8 貯蔵穴 1 (1/60)

SR20

不明確だが、掘方の一部が直線的で、土坑墓と判断した。長さ 1.3m 以上、幅 0.9m、深さ 0.3m を測る。

SR27

長さ 1.5m、幅 0.6m、深さ 0.05m を測る。底面がわずかに残る。整った方形を呈し、木棺墓等の可能性がある。

SR28

長さ 1.0m、幅 0.6m、深さ 0.3m を測る。切り合いが激しく、掘方がやや不明確。

SR29

不明確だが、掘方の一部が直線的で、土坑墓と判断した。長さ 1.4m 以上、深さ 0.2m を測る。

SR33

調査区西側の崖面で検出した掘り込みで、11 次調査の 21 号土壙墓下段の東側端部とみられる。幅 0.35m、深さ 0.3m。

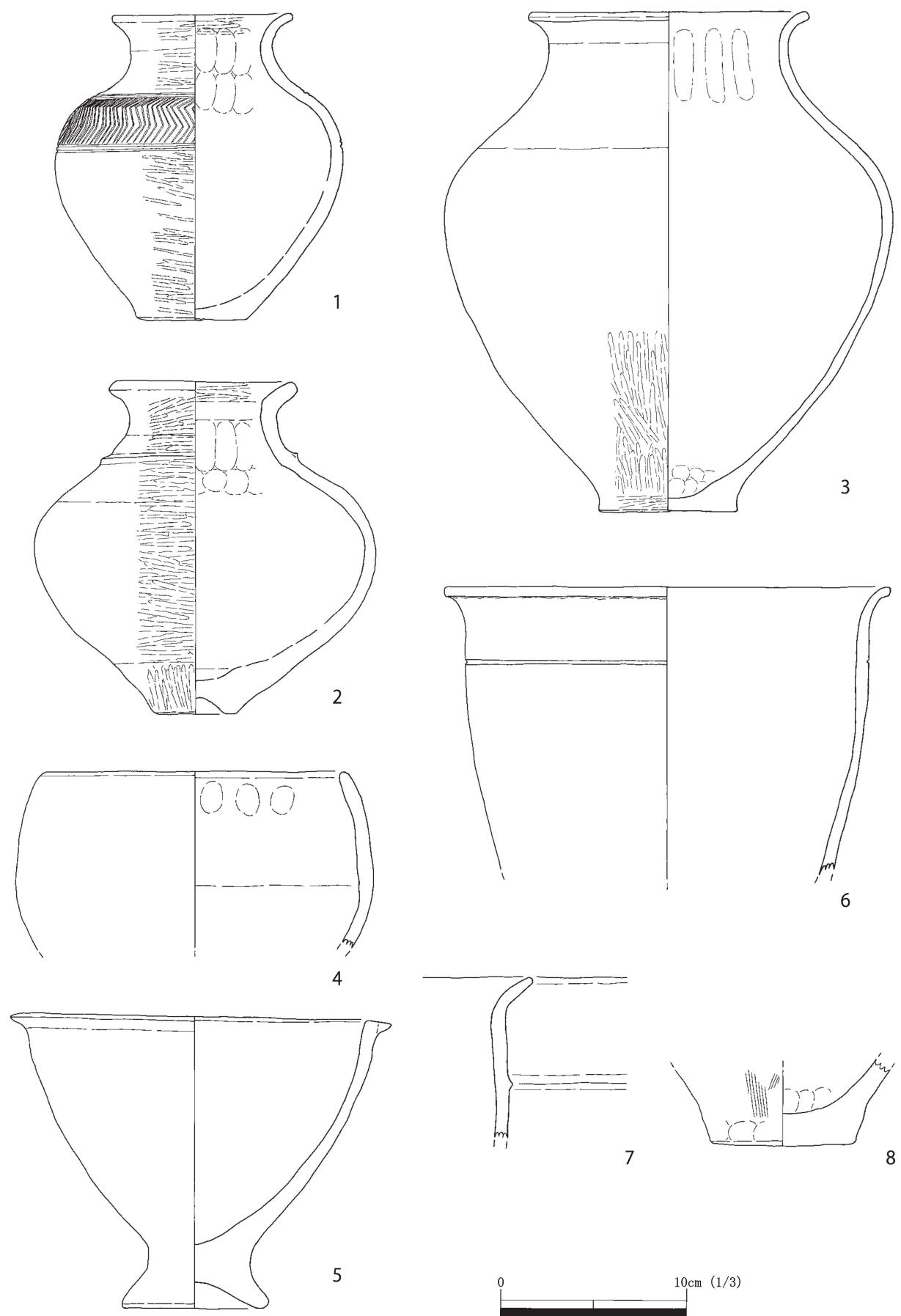


Fig9 SU04 出土土器 (1/3)

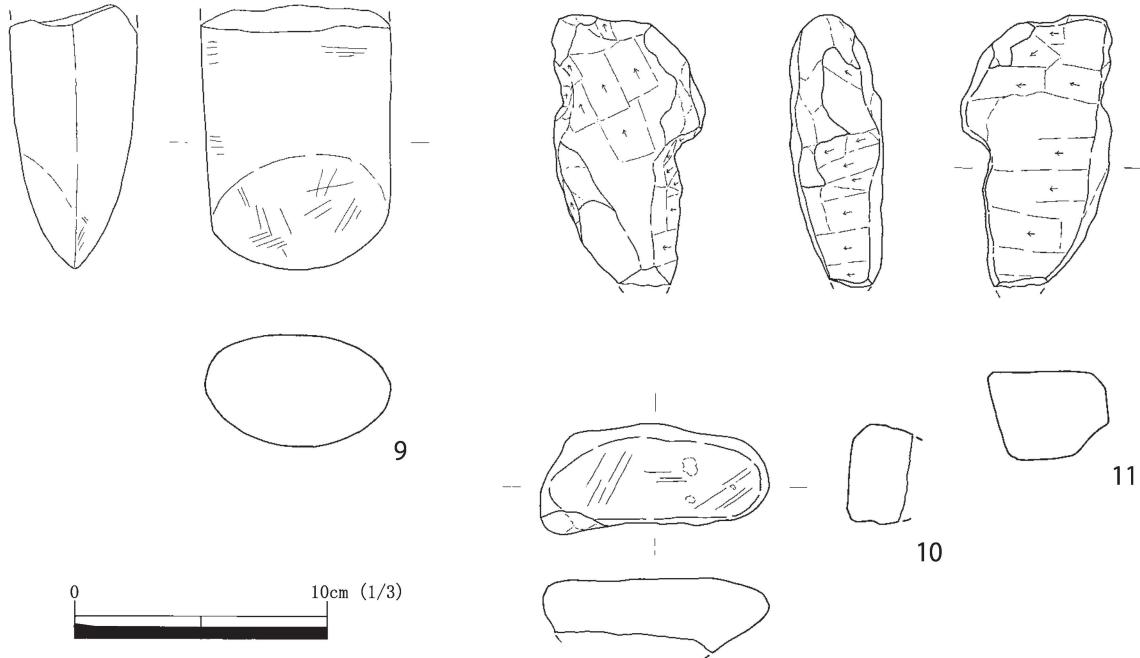


Fig10 SU04 出土石器 (1/3)

(2) 貯蔵穴

2基検出した。

SU04

調査区南側の崖面に少しかかって検出した。径は上端で2.2m、下端で3.0mを測る。深さは2.1mを測り、フラスコ形を呈す。底面から40cm程の厚さで黒色土の堆積があり多くの土器が出土したほか、底面付近で完形に近い土器がいくつか出土した。底面の一か所に径30cm、深さ8cm程の窪みがあり、梯子の据え付け跡の可能性がある。

1～3は壺。1は胴上部に沈線で羽状文を施す。2の胴部には孔が開いているが、これは穿孔ではなく、土器洗い時に開いたもの。4・5は鉢。6～8は甕。8は外面から底部をミガく。9は両刃石斧。玄武岩製。10は砥石か。被熱している。花崗岩製。11は不明加工石材。花崗岩製。

SU30

調査区の北東側で土坑墓群に切られて検出した。上部の埋土は地山に非常に近く、上端のラインはやや不明確である。径は上端で1.4～2.1m、下端で2.8m、深さは2.9mを測る。かなり深さがあり、安全のため重機により半裁をしながら掘削を行ったため、多少の遺物の取りこぼしがあるかもしれない。底面で長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.8mの隅丸方形の土坑を検出したほか、梯子の据え付け穴の可能性がある小穴を検出した。底部より150cmの厚さで黒色土が堆積する。底面の隅丸方形土坑の埋土は灰色の花崗岩バイラン土主体土で、締まりがない。

13～15が上層出土。13・14は壺。13はやや歪んでいる。15は甕。底部穿孔。16は玄武岩製の不明石器で、表面は平坦だが、裏面は丸い窪みが多数ある。

17～25が下層出土。17は蓋。18～20が甕。18・20は底部穿孔。21は壺。22は抉入石斧。23は両刃石斧。玄武岩製。24も両刃石斧か。玄武岩製。25は使用痕剥片か。安山岩製。

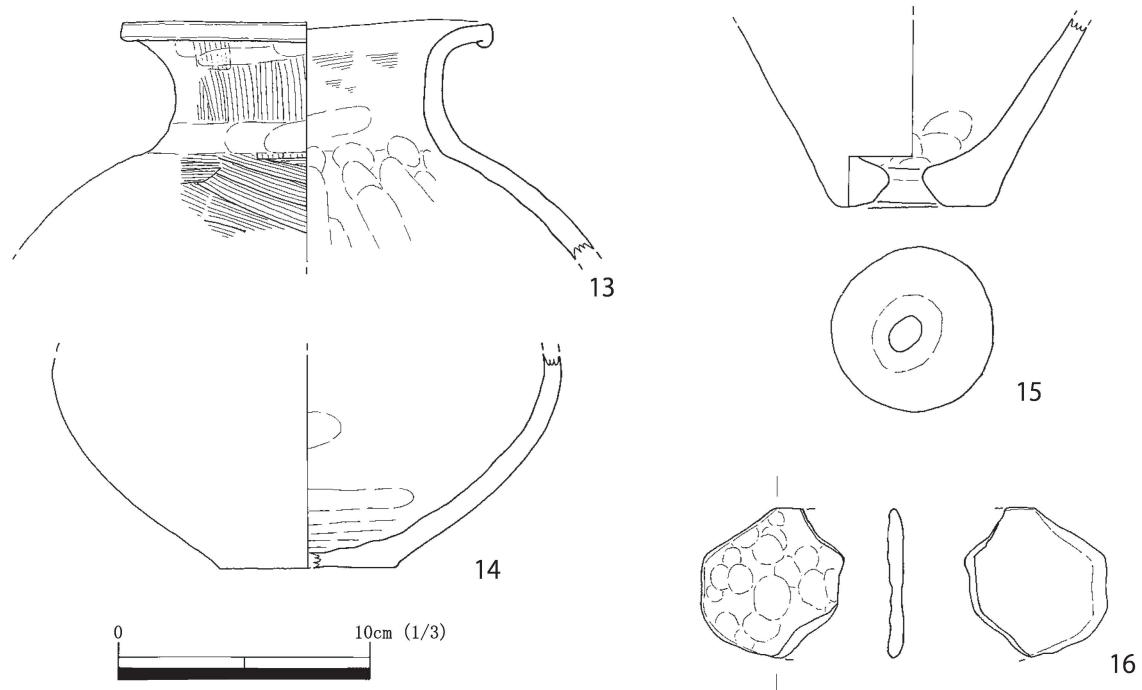


Fig11 SU30 出土遺物 (1/3)

(3) その他の遺物

柱穴・表土・攪乱などから出土した遺物である。

26はSP13出土。弥生土器の甕か。外面に煤が付着しており、中世の鍋の可能性もある。27～30は甕棺。
31～33は黒曜石製の石鏃。34は細石刃核。黒曜石製。

3. 小結

12次調査では、11基の土坑墓と2基の貯蔵穴、数基の柱穴を検出した。

貯蔵穴の時期はSU04が床面付近の出土土器から、弥生時代前期末と考えられる。SU30もほぼ変わらない時期であろう。SU30上層では中期に入る土器も出土しており、一定期間埋まりきらず、壅みとして残っていたものとみられる。SU30を多数の土坑墓が切っており、これら土坑墓群が貯蔵穴の壅みを利用して掘削された可能性も考えられよう。

土坑墓の時期は、遺物の出土が少なく、不明である。貯蔵穴よりも新しいことは確かであり、周辺の墓域の広がりから、弥生時代中期～古墳時代前期の中には収まる可能性が高い。わずかに出土した細片は砂粒を多く含むものが多く、弥生時代に属するようにも思えるが、盛土が削平された古墳の主体部が含まれる可能性もあるため、慎重な判断が必要である。

柱穴の時期も、遺物の出土が少なく不明確である。ただし、明確に柱痕跡を残すものもあり、何らかの施設が存在したことは間違いない。柱穴から出土した26は中世の土器の可能性もある。

なお、表土から細石刃核が出土しており、古い時代の人々の活動を示す遺物として注目できる。

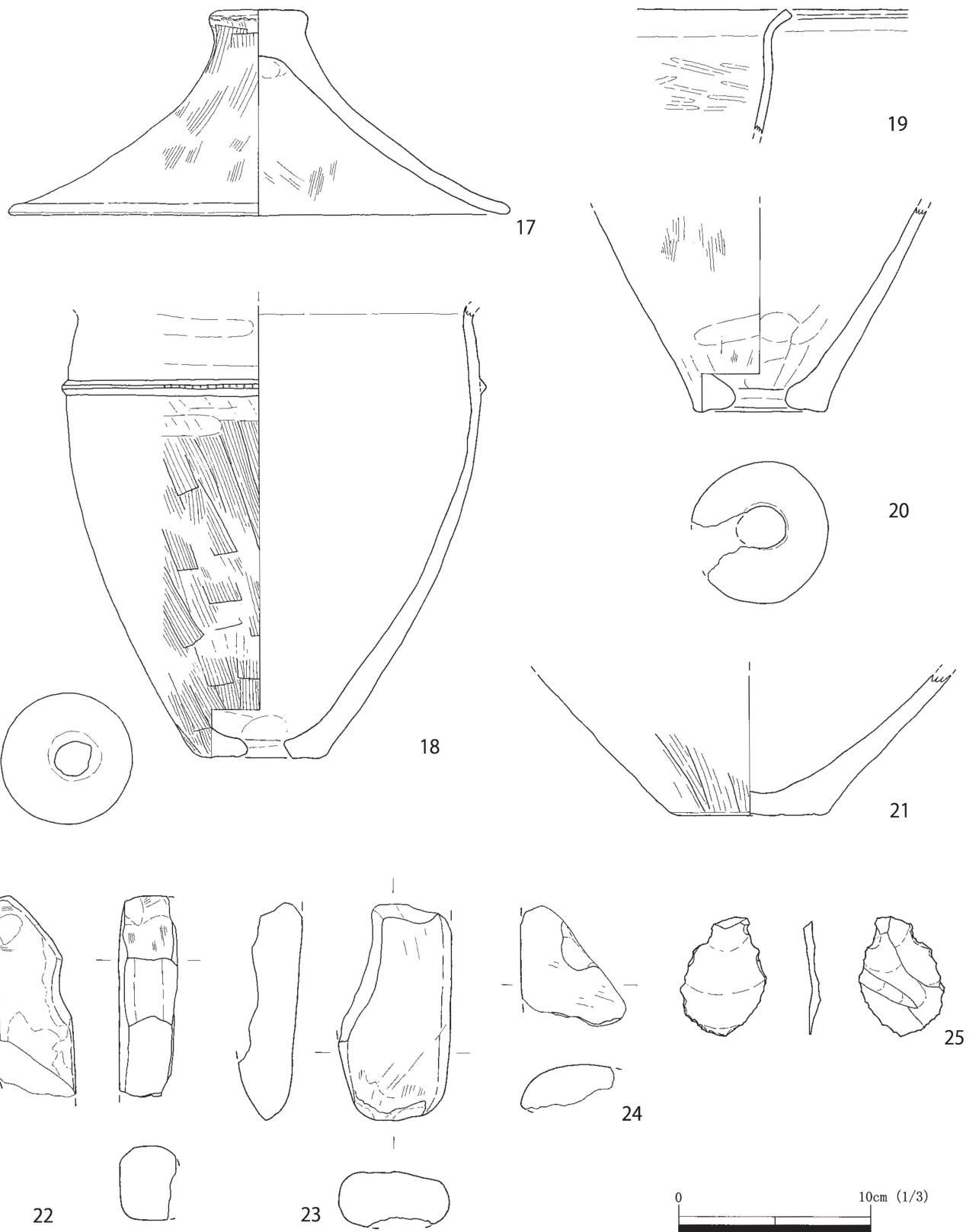
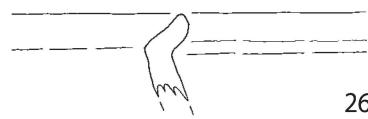
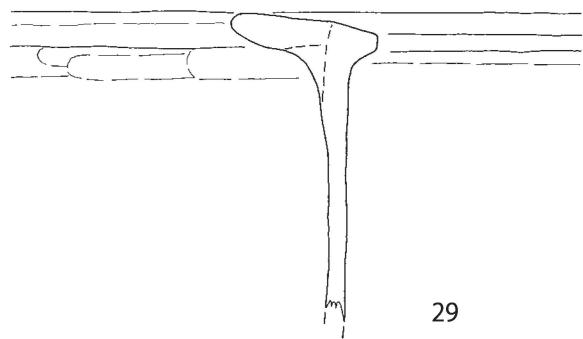


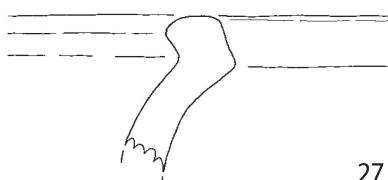
Fig12 SU30 下層出土遺物 (1/3)



26



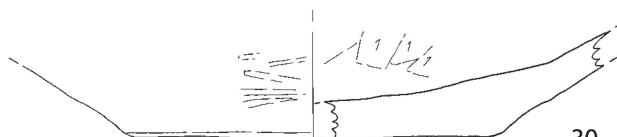
29



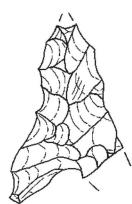
27



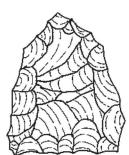
28



30



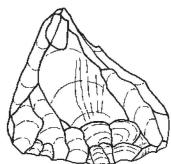
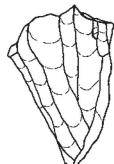
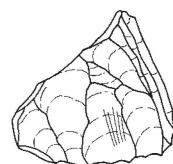
31



32



33



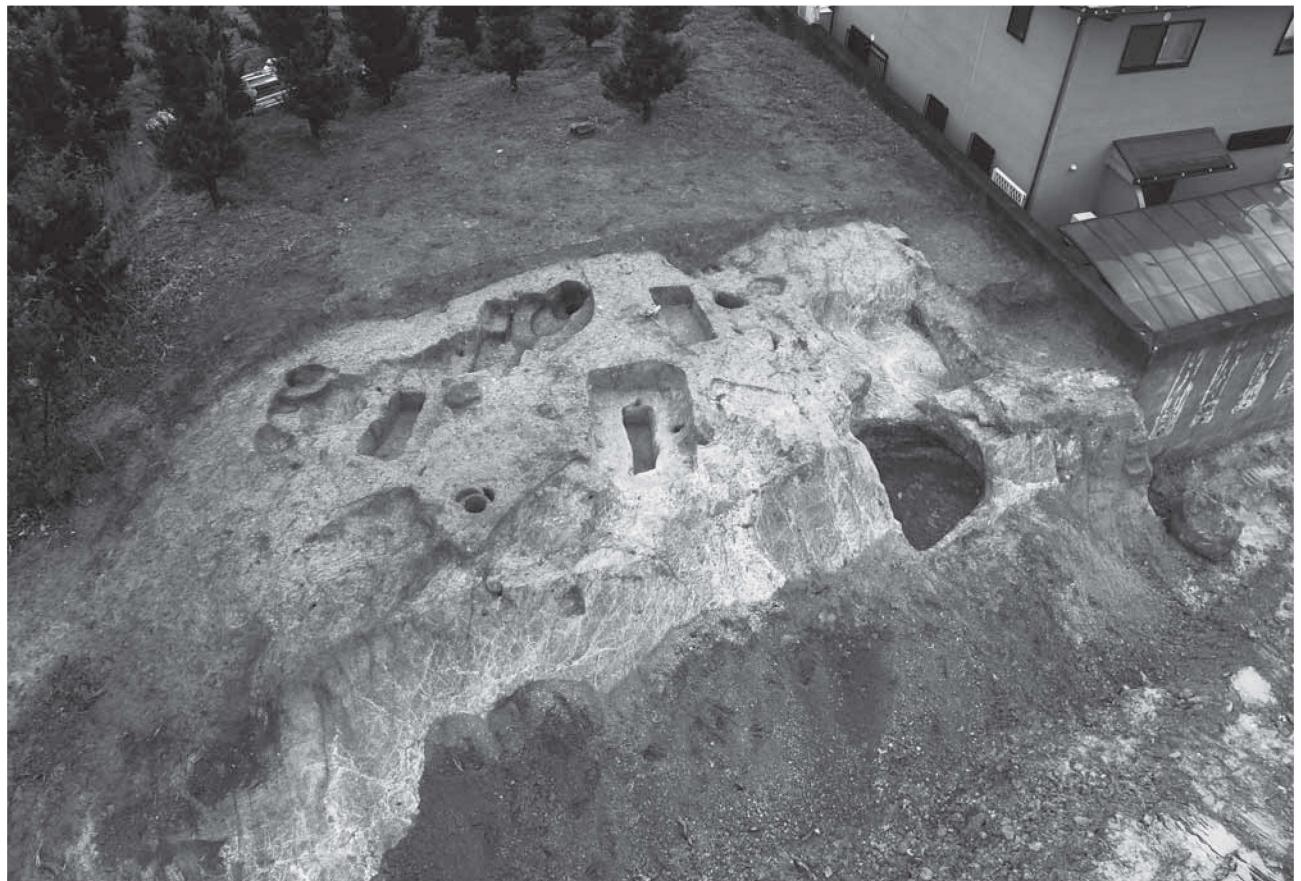
34



Fig13 その他の遺物 (1/3、1/1)



作業風景



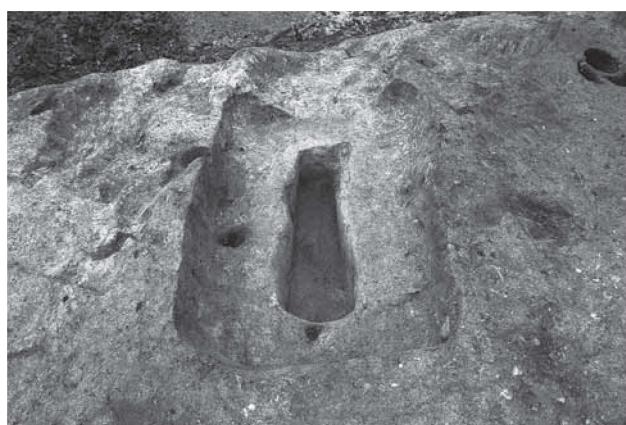
(1) 全景（西より）



(2) 調査区状況（北西より）



(3) SR05（東より）



(4) SR09（東より）



(5) SR09 土層（南東より）

PL 2



(1) SR11 土層（北西より）



(2) SR12 (南東より)



(3) SR27 (東より)



(4) 北東側 土坑墓群 (南東より)



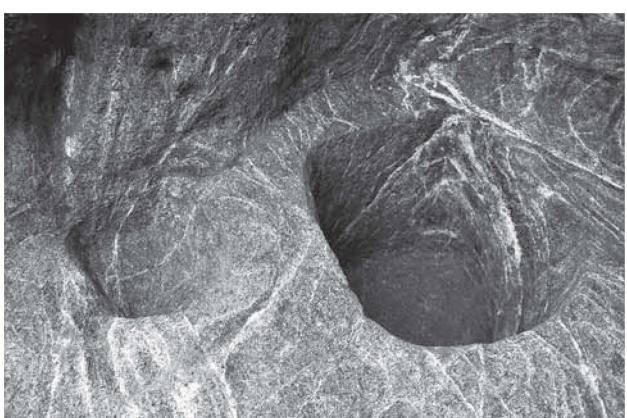
(5) SU04 (西より)



(6) SU04 遺物出土状況



(7) SU30 斷ち割り (北西より)



(8) SU30 内土坑

III 13次調査の記録

1. 調査の概要

13次調査地点は遺跡の北端部、丘陵の先端付近に位置する。本書で報告する第12次調査地点は西側に隣接しており、さらに西には11次調査地点が位置する。

本調査は敷地面積1,002m²のうち、宅地造成工事により埋蔵文化財に影響があると考えられる範囲で実施した。調査面積は338m²である。

基本層序は、基本的に表土直下のGL-20cm前後で基盤層の花崗岩風化土層となる。部分的にその上にAso-4火碎流由来の鳥栖ローム層が薄く堆積する部分がある。また、対象地は南西部が最も高く、北東部にかけてやや急に落ちるが、部分的に地山上に黒褐色土が堆積する。本堆積土は遺物を全く含んでおらず時期は不明であるが、後述する甕棺墓群を破壊する不明遺構の覆土と酷似している。

調査は、9月26日の表土掘削から開始した。廃土置きの都合状、調査は2区に分けて実施した。調査第1区は地形的に高い西側に設定。1区では甕棺墓、土坑墓の他、北側では甕棺墓を破壊する形で掘削された落ち状の不明遺構を検出。順次遺構検出、掘削、記録を実施した。1区の調査は11月8日までに終えたが、上記の落ちに遺物を多く含むことから、1区の北側を拡張し遺構の有無を行った。遺構は確認されず地形の確認、記録を行い11月14日・15日で調査区を反転し、翌16日から第2区の調査を開始。2区の遺構は疎らで、大部分が攪乱されていたが、甕棺墓を1基検出した。2区の記録は11月28日に終了。さらに遺構の有無を確かめるために、2区の東側にやや広いトレーニングを掘削。遺構は確認されず、記録等を行い12月6日に発掘調査を終了した。

2. 遺構と遺物

(1) 甕棺墓

甕棺墓は5基検出した。うち4基(ST02・03・04・05)は調査区の南西部の高所に分布しており、1基(ST09)は調査区の南東部に位置する。

ST02

調査区の南西部で検出した。単棺で口縁部を床面に設置した倒置棺である。この埋葬方法は佐賀県唐津市周辺で多くみられるもので、隣接する11次調査地点はもちろん周辺地域においても類例は確認されていない。甕棺そのものは土圧でつぶれており、墓壙は後世の削平によってわずかしか残存していないが口縁の配置や墓壙のプランから計画的であることが推定される。甕棺取り上げ後に墓壙の中心で柱穴状の遺構を検出した。位置的にみても本遺構に伴うものと考えられるが、詳細不明。

1が検出した甕棺である。口縁部および底部付近は比較的良好に残存するが、胴部の破片が一部欠失する他、残存する部分も小片のため接合できず、図上復元している。したがって、図示したものは本来の器形とはやや異なる可能性も考えられる。胴部最大径は中位以上にあり、頸部は外反せずに立ち上がるため口縁はやや内側に傾く。口縁部内側には粘土帯を貼付けし、外唇部の上下端には刻目を施す。口縁下には3条の、胴部上半には2条の凹線を巡らす。調整は不明瞭。本報告では金海式甕棺の範疇におさまるものとして報告するが、典型的な金海式の器形ではなく、ST04にもみられる「金海くずれ」的な様相もみられる。埋葬方法の特殊性を加味してみても特異な例といえよう。

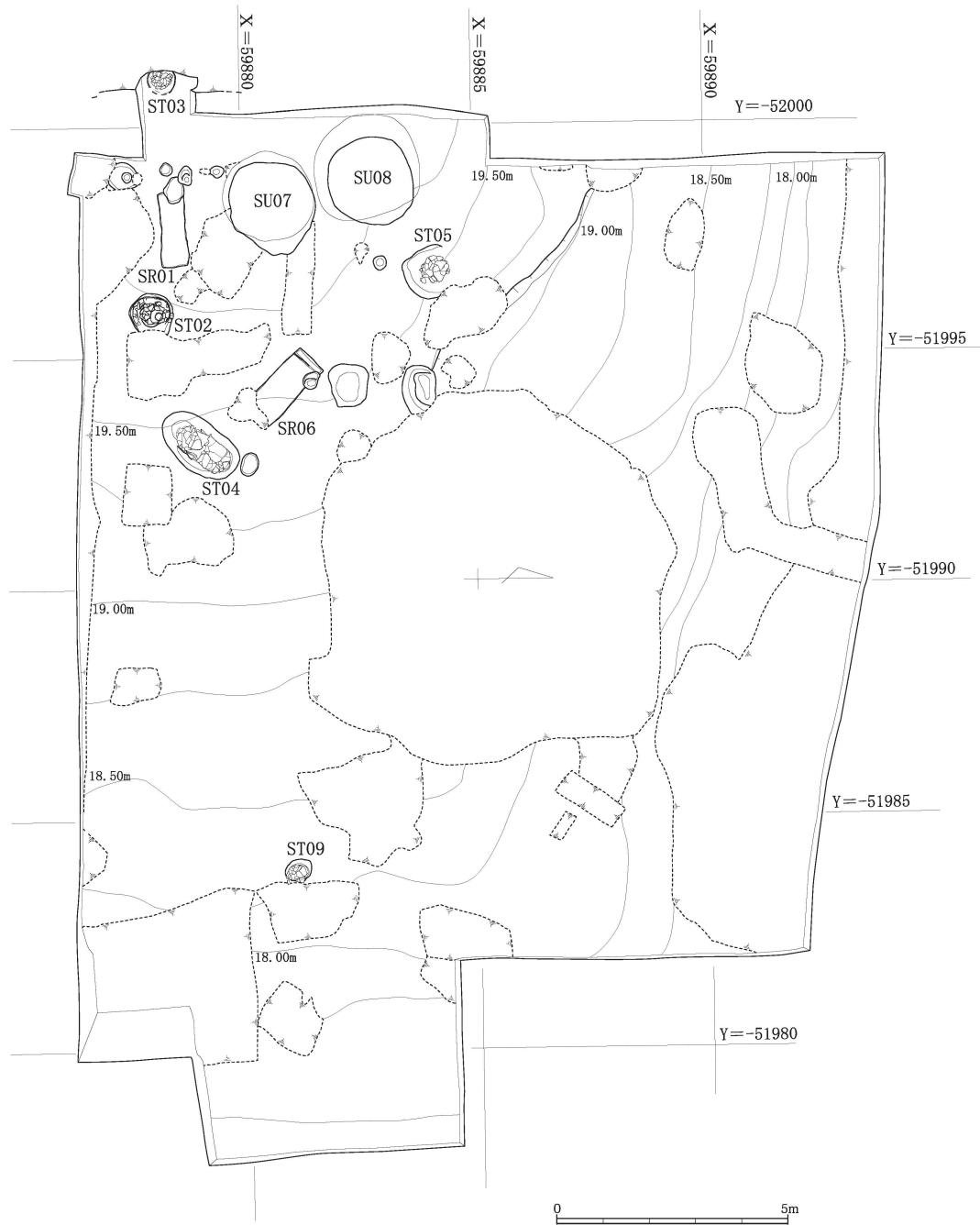


Fig14 弥永原遺跡第13次調査地点遺構配置図 (1/150)

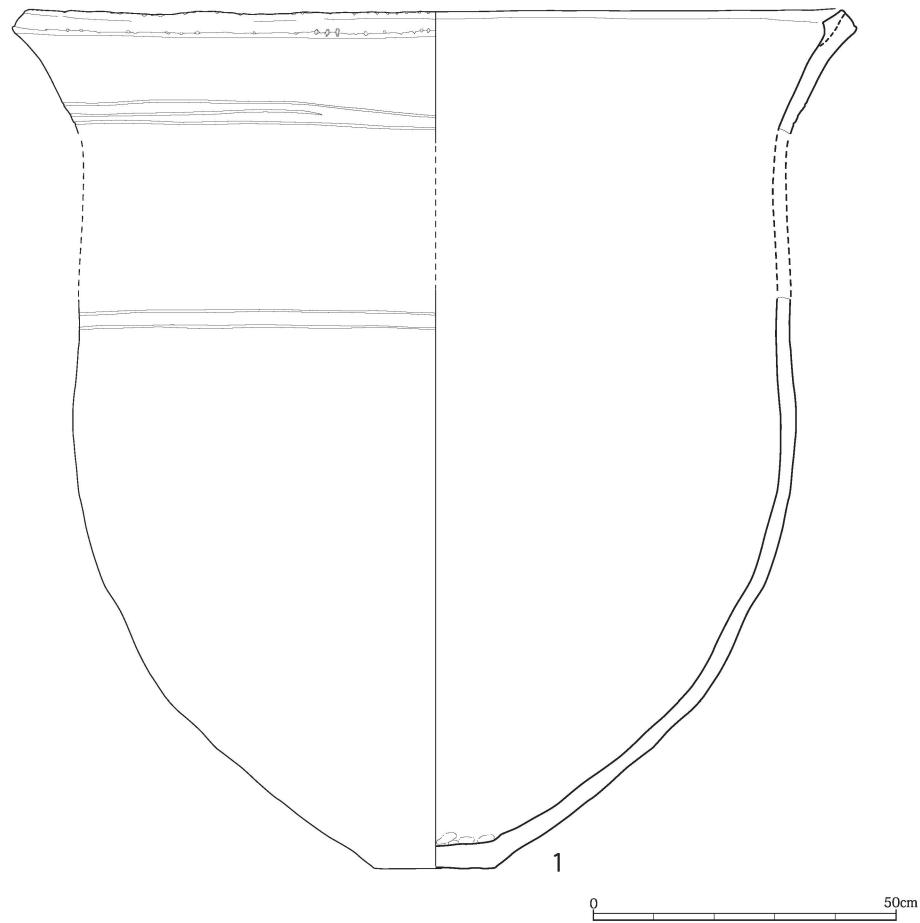
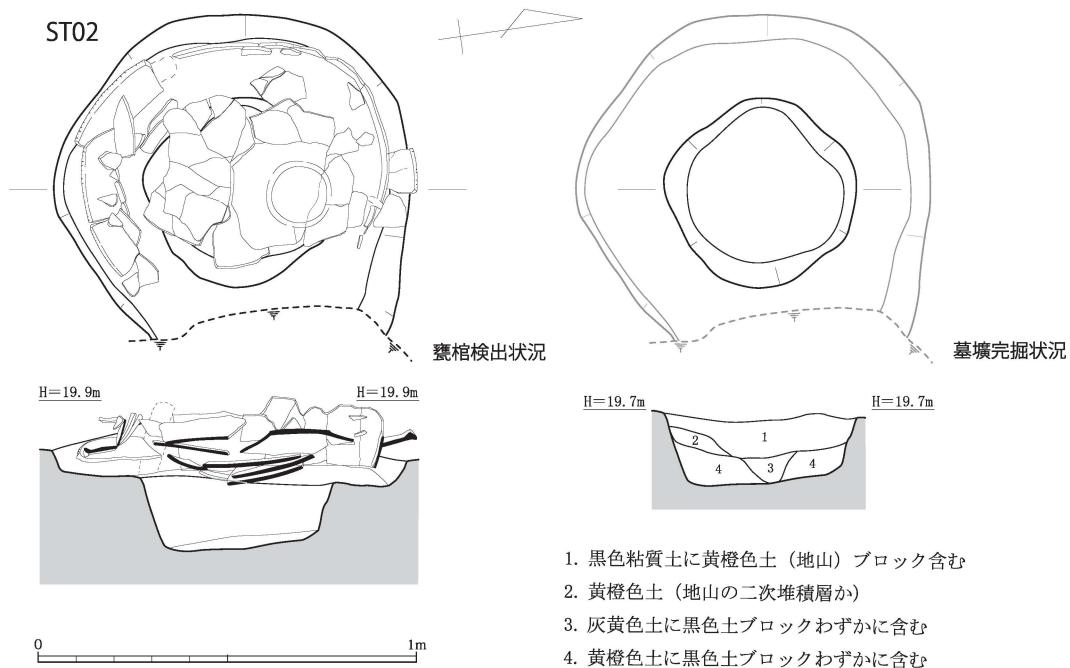


Fig15 ST02実測図 (1/20) および出土甕棺実測図 (1/8)

ST03

調査の南西端部で検出した。削平・攪乱により床面付近の脇部のわずかな部分が残存するのみで、詳細は不明である。以下示す遺物は甕棺上で確認した破片のうちの一つであるため、ここで出土遺物として記載するが、後述する SX10 のように後世の影響で、甕棺の破片が原位置を留めていないものもあり、ST03 に伴うかは不明。

2 は金海式甕棺の口縁片である。端部内側には粘土帯を貼付けて肥厚させ、上部には平坦面をもつ。器壁が荒れており、調整は不明瞭。

ST04

調査区中央やや西寄りで検出した覆口式の甕棺墓である。北西には SR06 が位置し、これに直交する。削平により、残存部するには床面付近のみであるが、本調査地点で検出した合口甕棺で唯一上下を確認できた遺構である。破壊された上半のうち一部は破壊後に堆積した覆土中から出土したが、大半は欠失する。

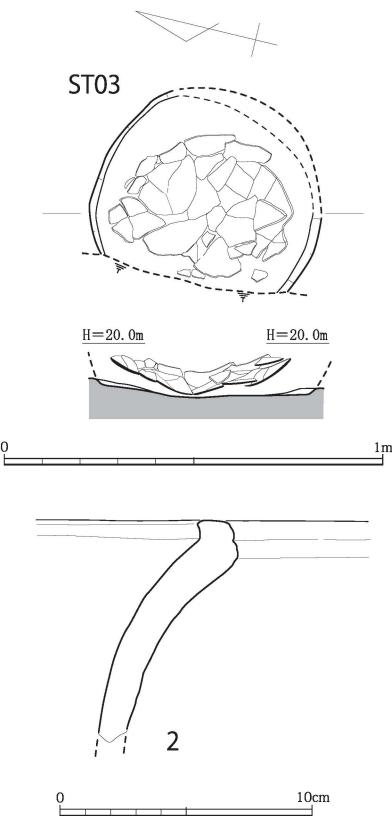


Fig16 ST03 実測図 (1/20)
および出土甕棺実測図 (1/8)

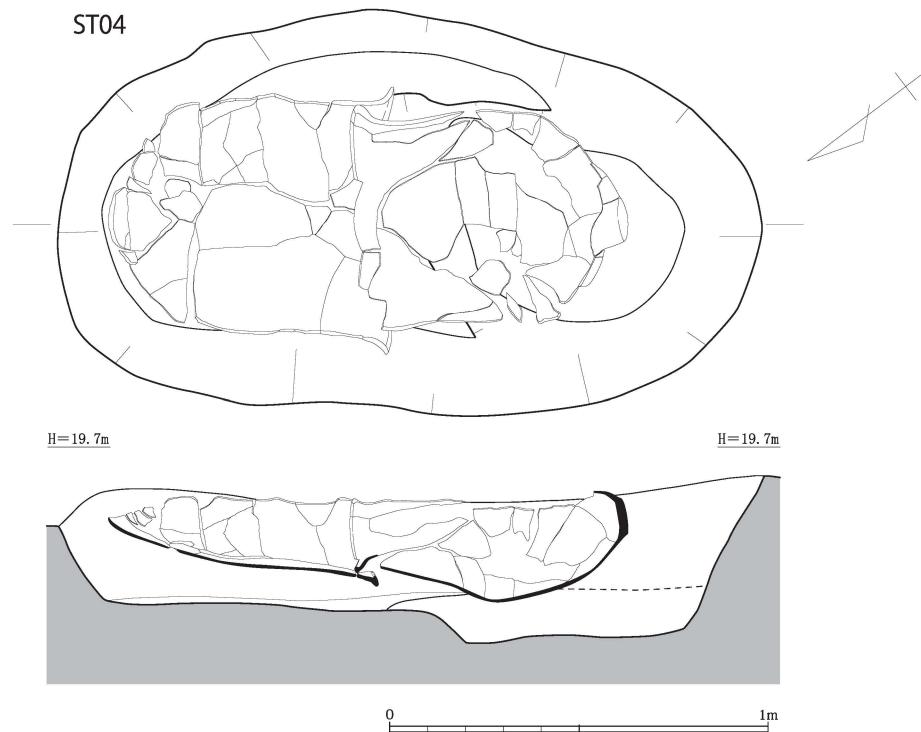


Fig17 ST04実測図 (1/20)

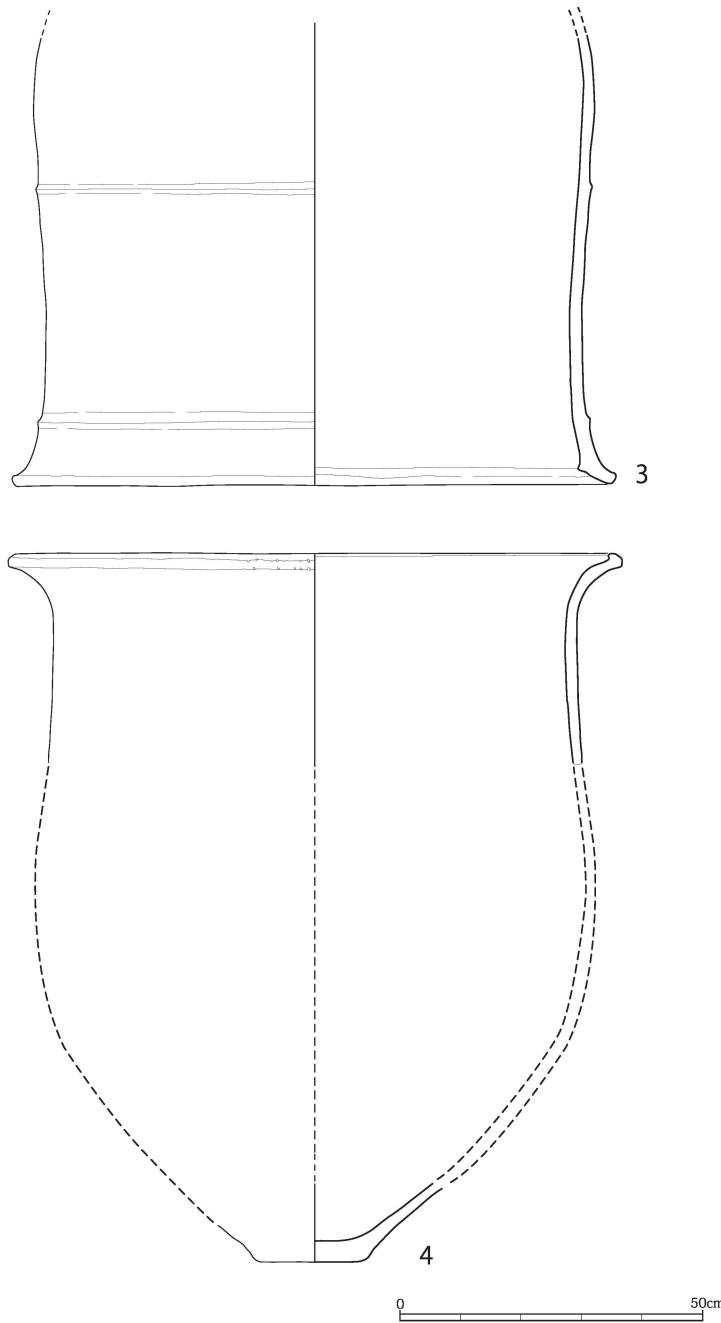


Fig18 ST04出土甕棺実測図（1/8）

3 は上甕。いわゆる「金海くずれ」ともいうべき器形をもつ。胴部は中位以下に最大径をもち、胴上位でやや窄まり口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口縁部内側への粘土帯の貼付けはなく、内側がやや突出する。頸部下および胴部上位には断面三角形の突帯を巡らせる。4 は下甕。遺構図に示した通り、検出時は床面付近のみながら、口縁部から底部までが残存していたが、取り上げの段階で一片が数 cm 程度にくずれる程に器壁が劣化しており、口縁部～胴部上位と底部付近を復元できたのみで胴部は接合できなかった。したがって、実測図は検出時の状態を参考に図上復元している。胴部上半はやや内側に傾きながら立ち上がり、口縁直下で大きく外反する。口縁部の外唇の上下には刻目の痕跡がわずかに残る。

ST05

調査区西側で検出した。ST03 同様、床面付近の胴部がわずかに残存するのみで、全容は不明。残存部から金海式甕棺と考えられる。

ST09

調査区の東側で単独で検出した。本甕棺の検出地点は調査区内の高所に位置する他の甕棺墓とは 1m 以上の比高差がある。やはり攪乱により墓壙床面付近の底部～胴部が残存するのみである。残存部は合口甕棺の下甕と考えられる。

5 が検出した甕棺である。胴部上半は接合できず、図化し得たのは底部～胴下半のみである。器壁は荒れており調整は不明瞭。

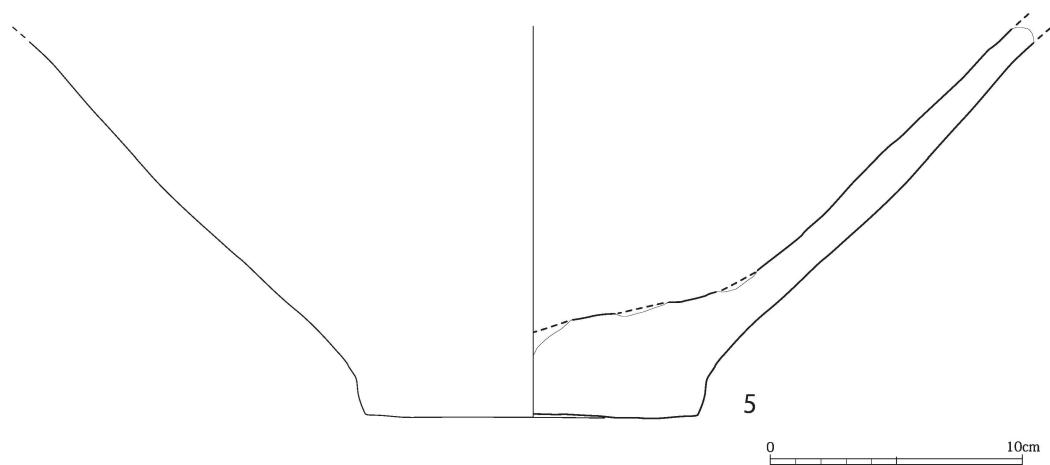
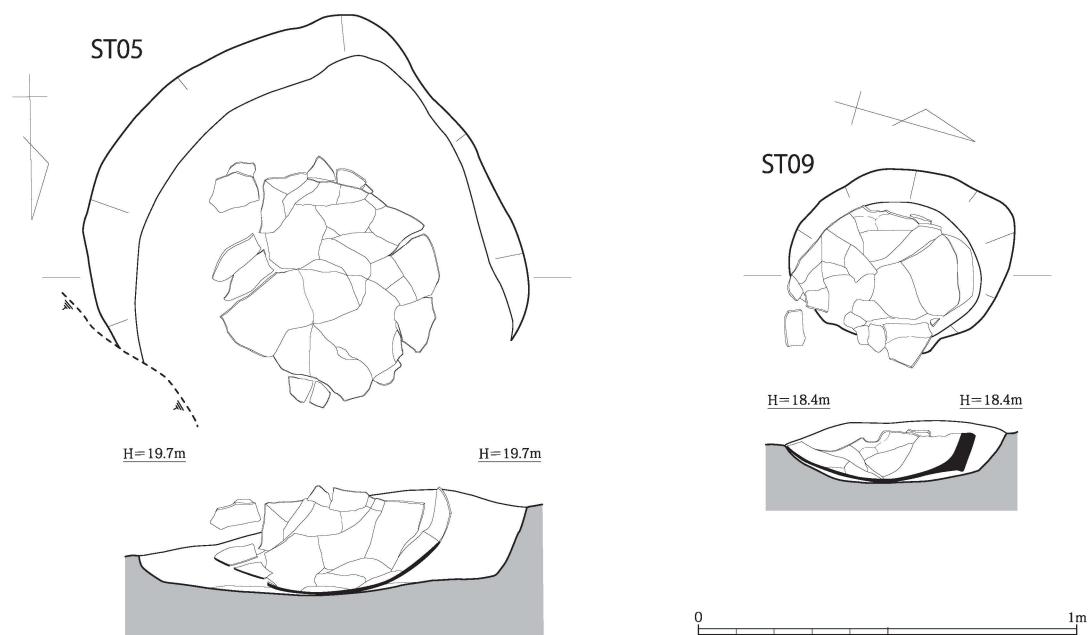


Fig19 ST05・ST09実測図（1/20）およびST09出土甕棺実測図（1/3）

(2) 土坑墓

土坑墓は2基検出した。後述するようにうち1基は木棺墓の可能性も残る。

SR01

調査区の南西部で検出した。東西方向の土坑墓である。西側をピットに切られる。幅は約55cm、長さは160cm前後であろう。深さは約20cm残存する。出土遺物は土器小片のみで図化し得るものはなく、時期は不明。

SR06

調査区中央部南西寄りで検出した。ST04の北西に位置し、これに直交する。南東側を攪乱に切られる。幅70cm、長さ170cm以上、深さは最大で約20cm残存する。整った長方形を呈し、北西部には小口掘方状の段があるため木棺墓の可能性もあるが、土層観察その他から明確な根拠は見いだせず、ここでは土坑墓として報告する。SR01同様、出土遺物は土器小片のみで時期は不明である。

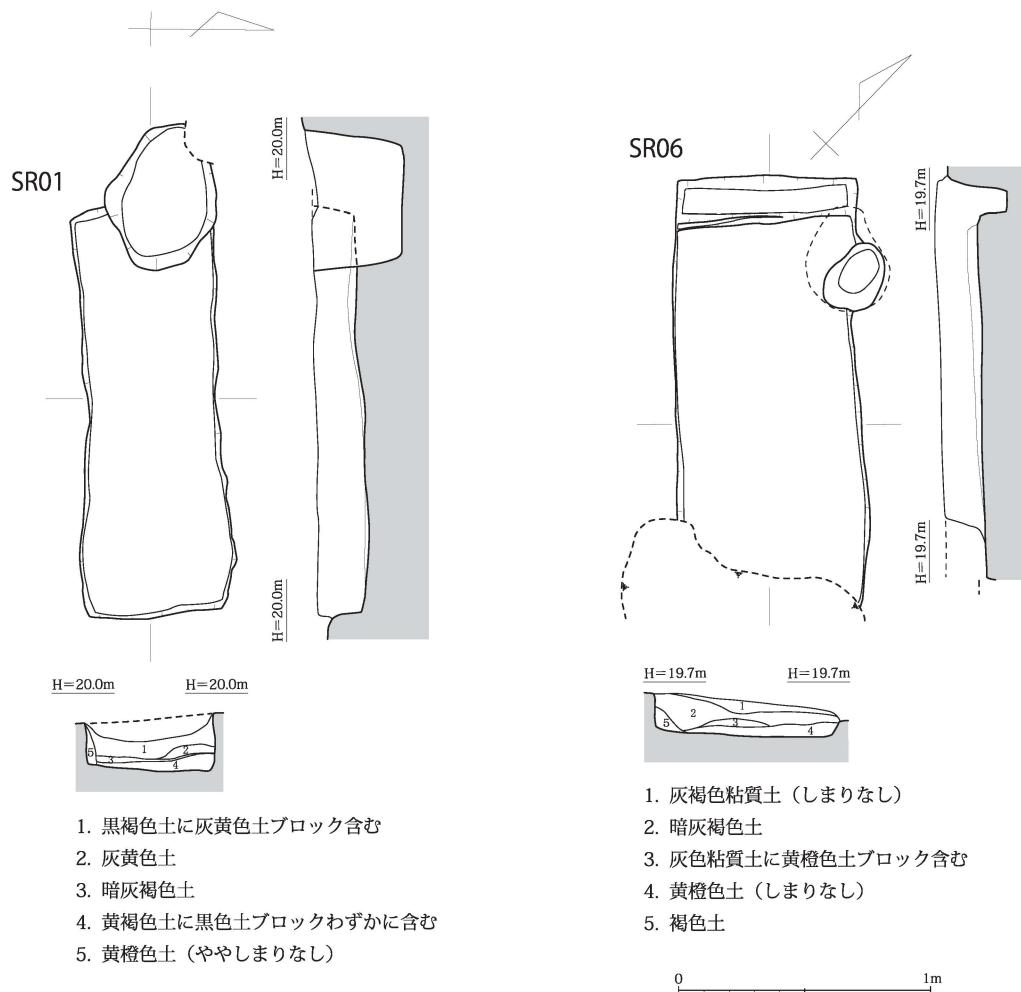


Fig20 SR01・SR06実測図 (1/30)

(3) 貯蔵穴

貯蔵穴は2基検出した。後述するように両者は隣接して位置する。

SU07

調査区西側で検出した。北側にはSU08が隣接する。上面の平面形は径約180cm～200cmのやや不正形な円形を呈し、床面は径190cm程度の比較的整った円形を呈する。深さは約260cm程残存し、中層で図示した壺が出土した他、中層～下層を中心に土器小片が数点出土した。以下の出土遺物から弥生時代前期末の遺構と考えられる。

出土遺物

6～11は上層～中層で出土した。6・7は壺である。6は口縁片。粘土帯を貼付け肥厚させ、口縁下端には刻目を施す。7は口縁～胴上半が残存する。胴上半～頸部は内湾しながら立ち上がり、頸部上半で強く窄まる。口縁部は強く外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。頸部には断面三角形の突帯を巡らせる。8～11は甕である。8は外傾しながら立ち上がり、口縁部直下で屈曲する。屈曲は典型的な如意形口縁と比較すると急である。胴上半には断面台形の高い突帯が巡り、これと口縁部には刻目が施される。外面ハケ目仕上げ。9～11は通称「亀の甲式」と呼称されるもので、口縁端部と胴部上位に断面三角形の突帯を巡らせる。9の口縁部は小さく、やや丸みを帯びる。口縁端部および胴部突帯には刻目を施し、胴部外面にはハケ目の痕跡が残る。10も口縁端部及び胴部の突帯に刻目を有する。

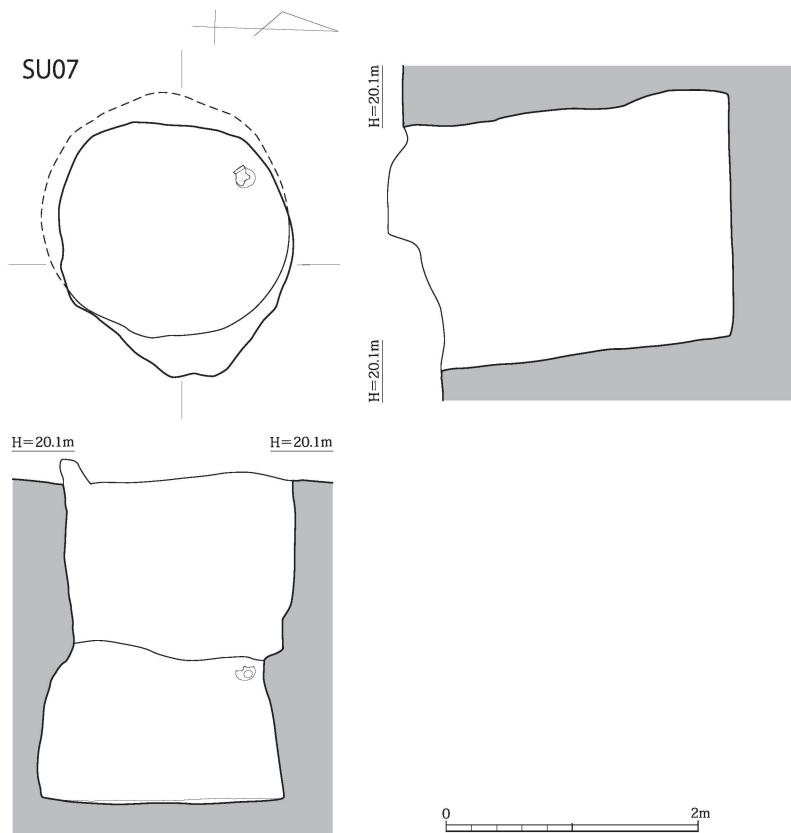


Fig21 SU07実測図 (1/60)



Fig22 SU07出土遺物実測図1 (1/3)

11は口縁部、胴部共に比較的シャープな突帯を貼付けており、刻目はつかない。12～15は下層出土遺物。Fig21に図示した壺を基準に以下を下層出土遺物として取り扱っている。12はFig21に図示した壺である。ほぼ完形であるが、全体的にやや歪んでいる。扁球形の胴部をもち、胴部と頸部の境にわずかに稜をもつものの、段はもたず緩やかに外反し口縁部へといたる。外面の底部付近、および内面の頸部付近には成形時の指頭痕が強く残る。13～15は甕である。13は胴上半～口縁部が残存する。いわゆる如意形口縁をもち、胴上半には断面台形に近い突帯を巡らせる。口縁端部および突帯には刻目を施す。外面

ハケ目仕上げで、内面は頸部付近に指頭痕が顕著に残る。14・15 は底部片である。15 は底部のほぼ中央に穿孔を施す。

SU08

調査区西側、SU07 の北側で検出した。上面の平面形は径約 190cm 程度の比較的整った円形を呈し、床面は径 230 cm 前後のやや歪んだ円形を呈する。深さは約 230cm 程度残存し、下半は東壁を除きフラスコ状に内側に傾きながら立ち上がり、中層以上はほぼ直に立ち上がる。出土遺物は少ないが、以下に図化した遺物から SU07 とほぼ同時期の弥生時代前期末前後の遺構と考えられる。

出土遺物

16 は壺の頸部～口縁部片である。やや強く外反しながら立ち上がる。頸部には断面三角形～台形の低い突帯を巡らせる。17・18 は甕である。17 は胴上半～口縁部片で、如意形口縁をもつ。口縁部内面にはわずかにハケ目が残るが、外面の調整は不明瞭。18 は底部片である。外面の底部付近にわずかにハケ目が残る。

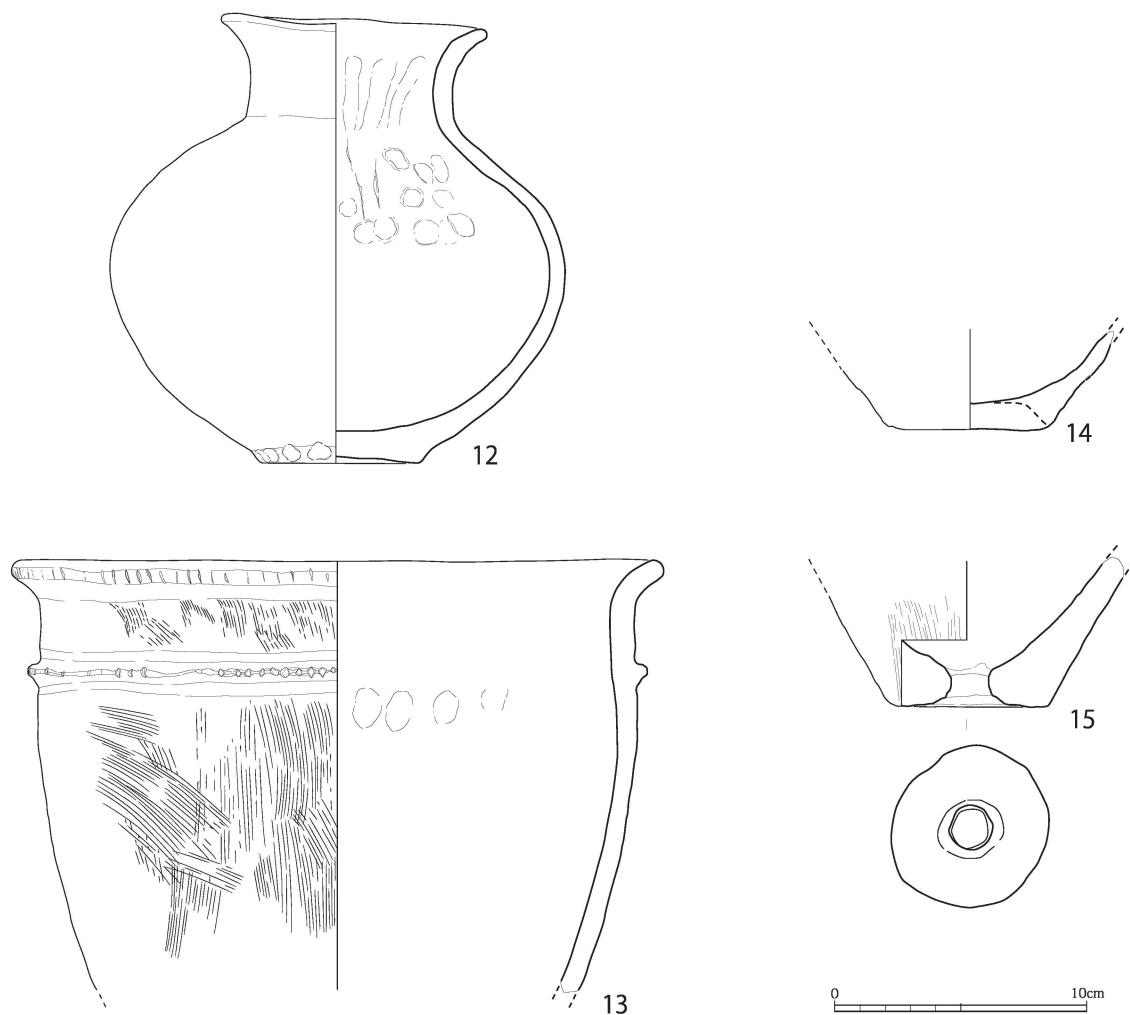


Fig23 SU07出土遺物実測図2 (1/3)

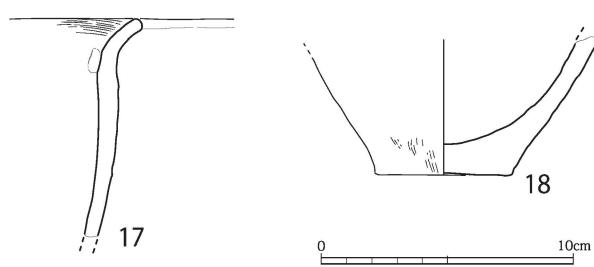
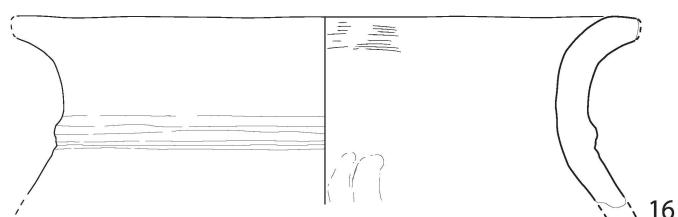
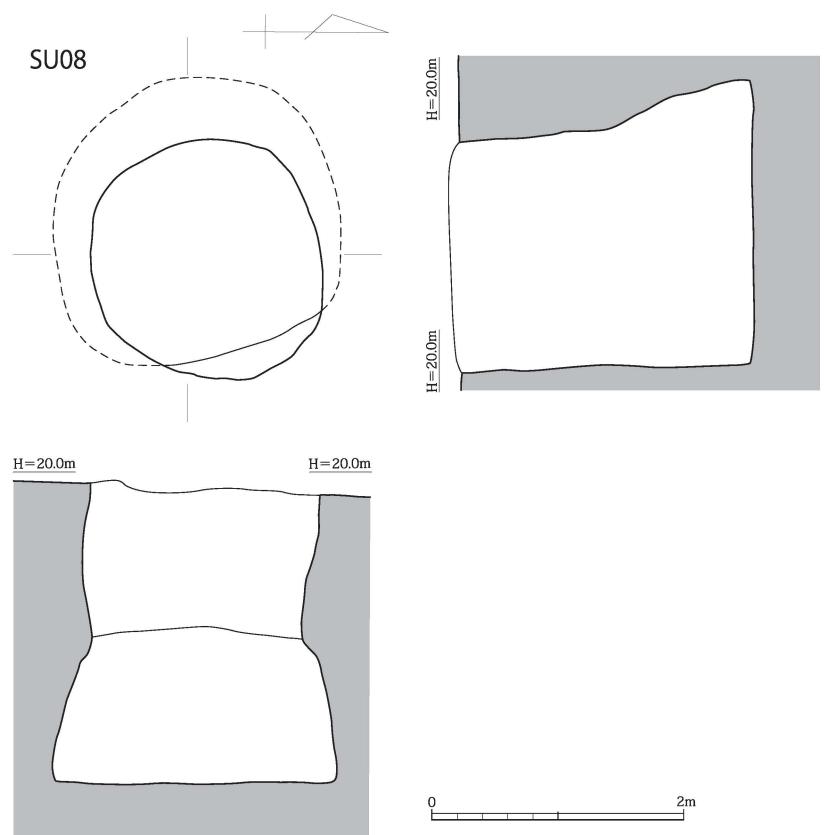


Fig24 SU08実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)

(4) 不明遺構

ここでは詳細不明の人為的な掘削の痕跡を不明遺構として記載する。

SX10

調査区西側で検出した詳細不明の段落ち状遺構である。落ち際の覆土中からは甕棺を中心とした土器の破片が多数出土した。出土遺物は以下に図示したとおり、甕棺も含めて弥生時代前期の遺物に限定されるが、詳細な掘削時期については不明。11次調査では古墳後背の溝を掘削する際、甕棺を破壊している例がある。また、11次調査で実施された現況測量図をみると本調査地点と12次調査地点の間付近に円形の高まりがあることが分かる。以上からこの段が古墳築造に伴う地山削り出しの痕跡である可能性もある。

出土遺物

19～22は甕棺である。図化したのは口縁部片(19・20)および底部片(21・22)のみであるが、この他に胴部片も多数出土している。23・24は壺である。23は口縁～頸部片、24は底部片である。25は甕の底部片。26は滑石製の紡錘車である。27は玄武岩性の石斧、今山産であろう。残存部はわずかである。

(5) その他の出土遺物

ここでは攪乱出土遺物をその他の出土遺物として報告する。28は庄内式系の甕の胴部片である。胴部上半には平行～左上がり方位の細筋のタタキが残る。

3. 小結

13次調査地点は、調査区のほぼ全域に攪乱が広がる他、甕棺の残存状況が顕著に示す通り、一律して削平されており、決して良好な状態で埋蔵文化財が残存していたとは言い難い。ところが、検出した遺構やその内容から弥生時代前期における場の利用や変遷を捉えるうえで貴重な情報を得ることができた。特にST02の倒置甕棺は周辺ではみられない特殊な墓制であり、南区はもちろん、ひいては市域における弥生時代墓制を考える上で大変貴重な資料となり得る。

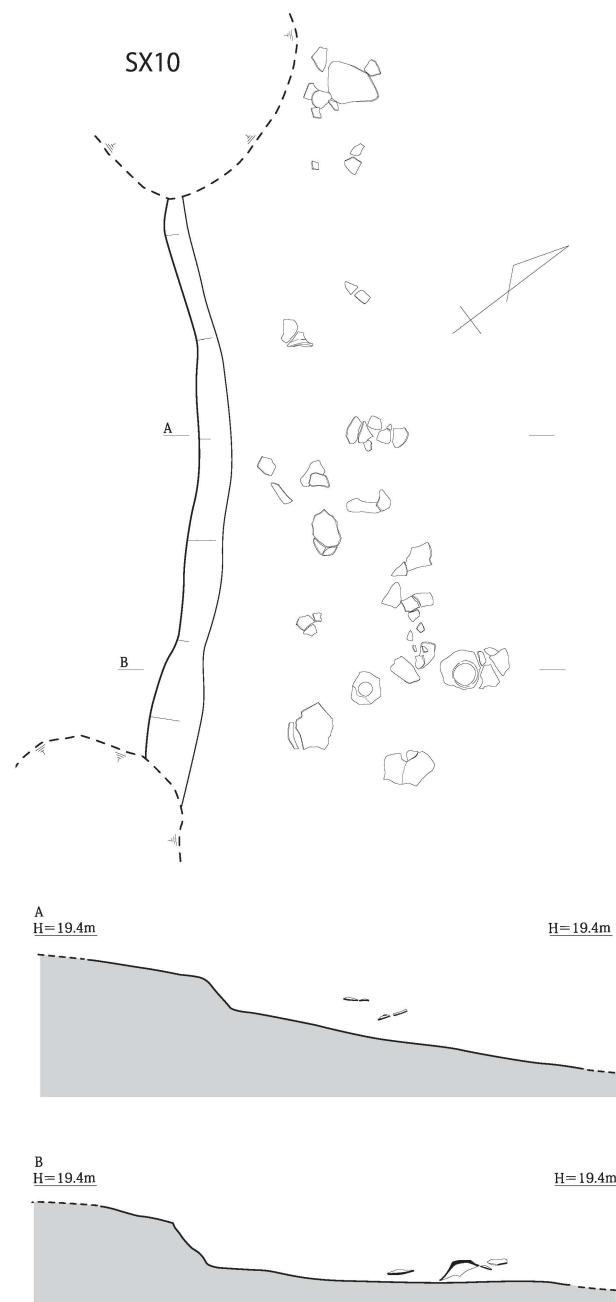


Fig25 SX10実測図 (1/40)

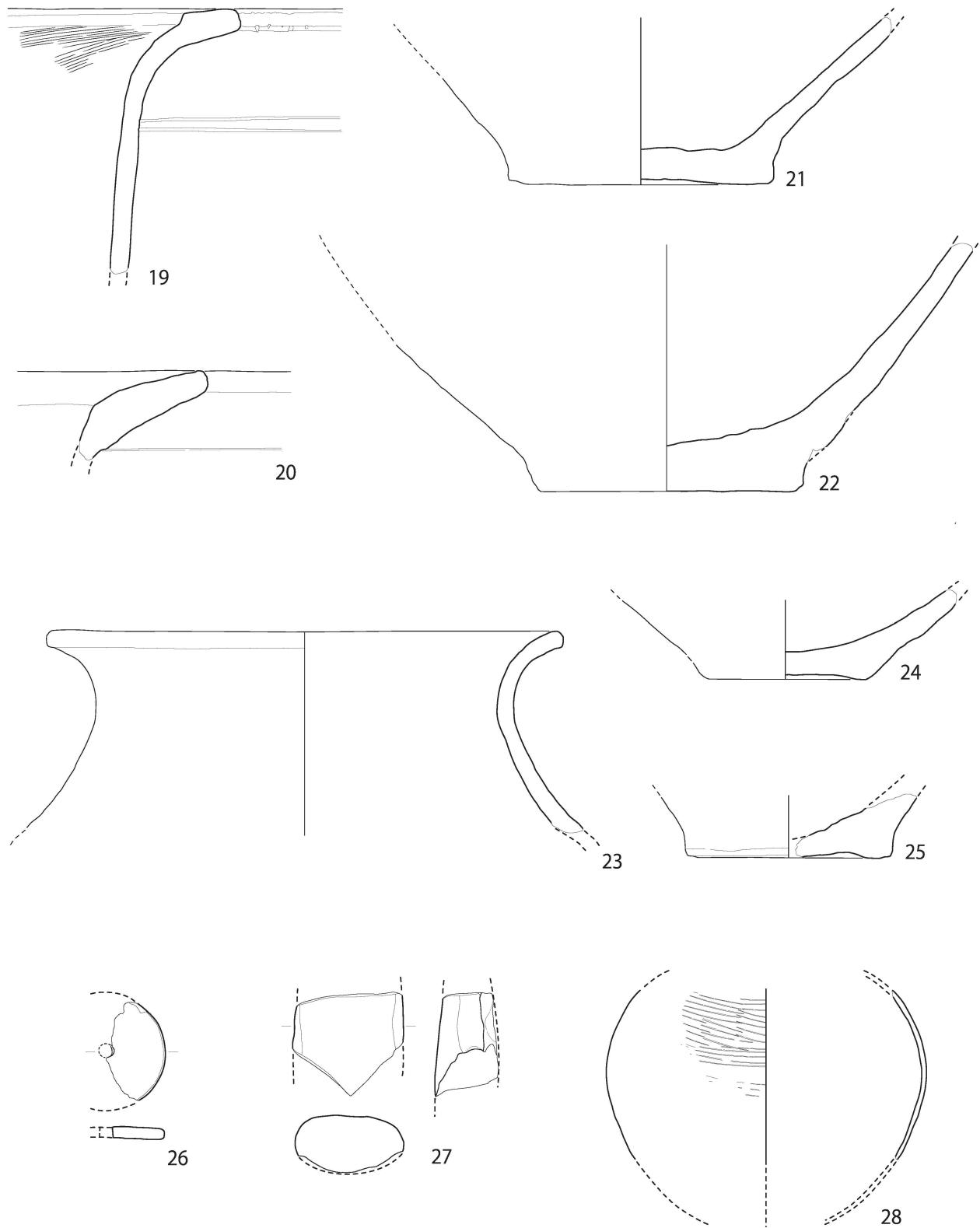


Fig26 SX10出土遺物実測図およびその他の出土遺物実測図 (1/3)

PL 3



(1) 調査第1区（南側）全景（北東から）



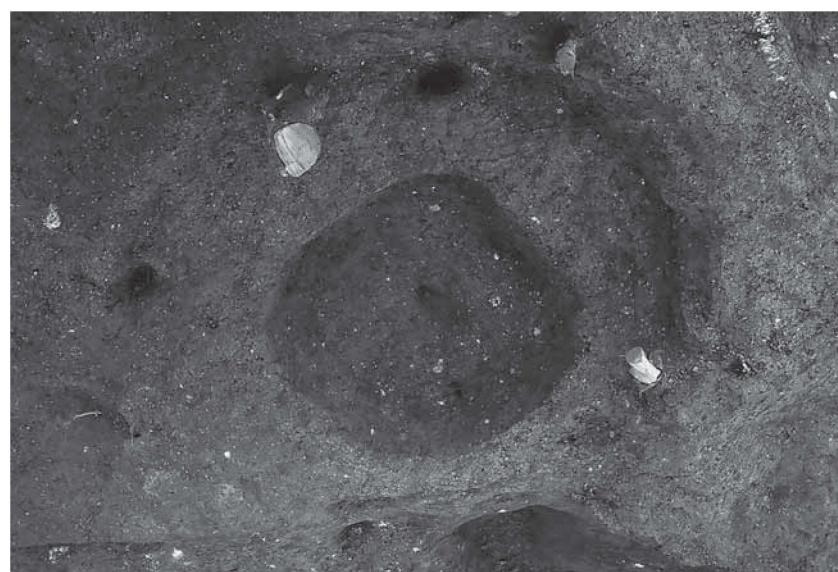
(2) 調査第2区全景（西から）



(1) ST02 検出状況（東から）

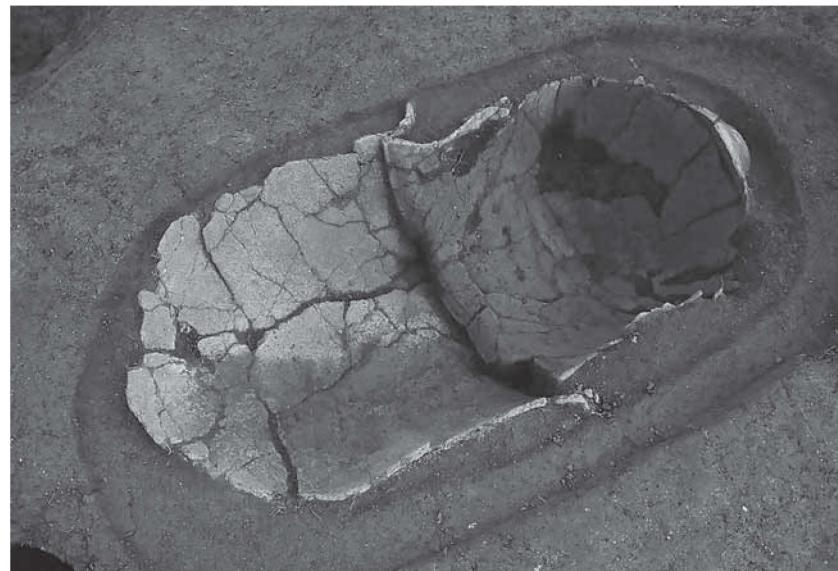


(2) ST02 蔊棺底部除去後（東から）

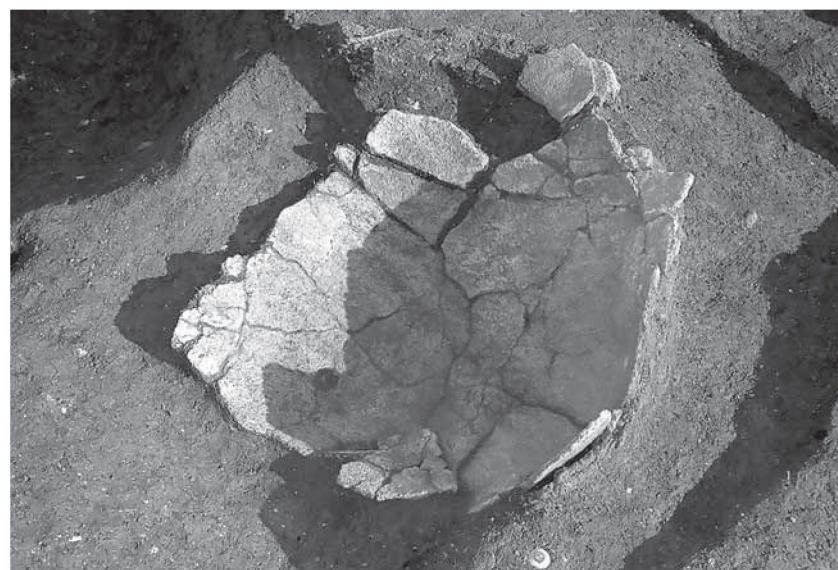


(3) ST02 墓壙完掘状況（東から）

PL 5



(1) ST04 検出状況（北から）



(2) ST05 検出状況（西から）



(3) ST09 検出状況（西から）



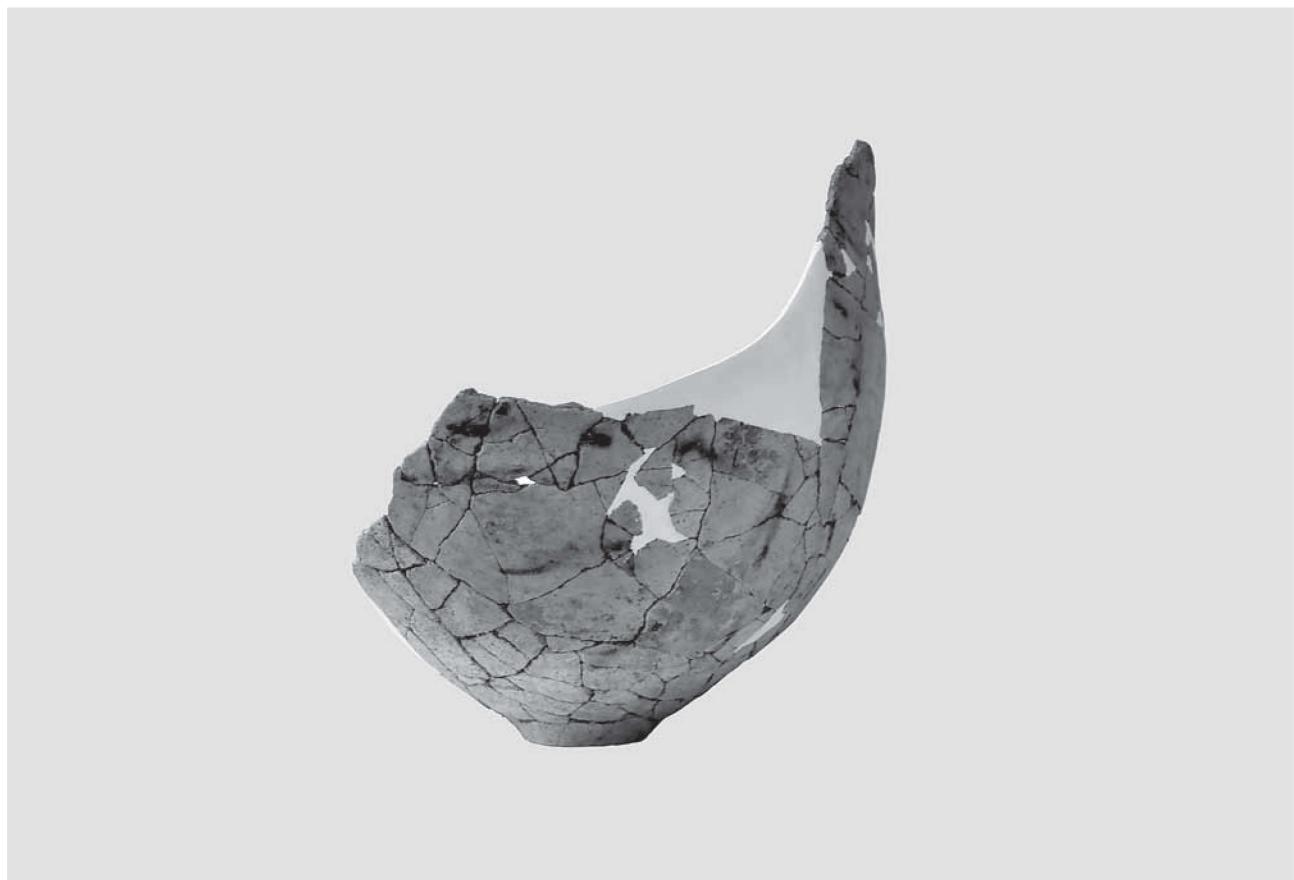
(1) SRO1 完掘状況（西から）



(2) SR06 完掘状況（北西から）



(3) SU07・08 半裁状況（北東から）



(1) ST02 餰棺 (1)



(2) ST04 上甕 (3)



(1) SU07 出土遺物 (8)



(2) SU07 出土遺物 (9)



(3) SU07 出土遺物 (10)



(4) SU07 出土遺物 (12)



(5) SU07 出土遺物 (13)



(6) SU07 出土遺物 (15)



(7) SU07 出土遺物 (26)



(8) SU07 出土遺物 (27)

IV まとめ

12次調査地点・13次調査地点では弥生時代前期末の貯蔵穴群および中期中頃にかけての土坑墓・甕棺からなる墓域を検出した。最後に調査成果を総括するが、両調査地点のさらに西側には11次調査地点が接しており、各調査地点の位置関係はもちろん、地形的連続性や検出遺構の相関性からみても各調査地点検出遺構は同一の遺構群と考えてよい。したがって、ここでは11次調査・12次調査・13次調査の各調査成果から、一帯の土地利用およびその変遷をまとめたい。

一帯において、遺構という明確なかたちで人跡がうかがえるのは弥生時代前期後半～前期末である。検出された遺構は貯蔵穴のみであるが、11次・12次・13次の各調査地点で計17基が検出されている。分布をみると南北約20m、東西約30mの間で一群をなしており、地形からみて丘陵頂部を積極的に利用していることが分かる。これに伴う住居は未検出であるが、11次調査地点では貯蔵穴群に後出するとされる住居が裾部で検出されており、これに隣接して弥生時代前期～中期初頭に多くみられる梁間の間隔が狭い掘立柱建物がある。柱穴からは遺物の出土がないため時期は不明であるが、建物の特徴から当該期の集落を構成する一部の可能性がある。

貯蔵穴群の埋没後、一帯は墓域へと変化する。弥生時代の墓として土坑墓、甕棺墓が認められる他、不明確ながら木棺墓の可能性があるものも確認されている。土坑墓は出土遺物がほとんどなく時期の特定が困難である。対して、編年研究の進展により器形そのものから時期を特定できる甕棺墓をみると、金海式、城ノ越式、汲田式が確認されている。つまり、貯蔵穴の埋没後、時をおかずして墓域化したものと考えられる。これについて興味深いのは12次調査の貯蔵穴と甕棺の関係で、SU30埋没後にそのまま土坑墓が複数基営まれている。土坑墓の時期は不明であるが、周辺の金海式甕棺の存在から直後であった可能性も十分考えられよう。甕棺についてみれば、11次調査報告で言及されているとおり、同時期の甕棺墓で群をなしつつ、各時期の分布傾向が異なる。すなわち、11次調査の金海式甕棺墓群は調査区北西の丘陵緩斜面上に位置し、城ノ越式以降の甕棺墓群は丘陵の高所に認められる。13次調査で検出した甕棺墓群はいずれも金海式甕棺でやはり群をなしつつまとまりをもつ。11次調査・13次調査の金海式甕棺は単なる造墓集団の違いの可能性もあるが、11次調査ではやや古層を示す器形が認められるのに対し、13次調査で確認した甕棺のうち器形が推定できるST02・04はやや特殊な「金海くずれ」ともいるべき器形で、やや新相を示す可能性もある。このようにみれば、時期によって墓域が移動した可能性も考えられよう。

一帯に関してみれば弥生時代中期中頃以降の遺構は前代に比して減少する。少なくとも12次調査地点・13次調査地点が位置する丘陵東側では検出されていない。対して丘陵西側の11次調査地点では中期後半および後期とされる竪穴住居が南側の斜面上で検出されており、場の利用に変化があったものと考えられる。あるいは時期不明の土坑墓のなかには本時期に帰属するものもあるかもしれない。しかし、出土遺物の総量をみても積極的な土地利用とはい难以。

古墳時代以降も引き続き丘陵の西側が積極的に利用される。検出される遺構は墳墓のみである。初頭～前半の方形周溝墓および円墳が各2基検出され、その分布範囲は丘陵の頂部から南北の斜面・緩斜面上にまで及ぶ。発掘調査に先立ち実施された確認調査では40号墳SO40主体部付近で鉄剣が出土しており、副葬品と考えられる。なお、本文中で言及したとおり、13次調査のSX10の落ちは古墳に伴う可能性があり、攪乱からではあるが同時期もしくはやや遡る甕の破片が出土している。遺構がまとまるのは本時期前後までで、以降は11次調査で古墳時代後期の土坑墓が1基検出されている他、古代～中世の遺構が認められているのみで、場の利用という点からみれば、断続的、かつ低調なものとなる。

11次・12次・13次の各調査地点は段丘北端の低丘陵の大半を占めており、実施された調査面積の合計は約 1979 m²を測る。検出遺構の種類も多く、特徴的な個々の遺構はもちろん、それらのまとまりによる遺構群を対象とした多角的検討は、当時の集落・墓域のあり方や土地の利用および変遷を検討するに非常に有用になることが考えられる。ここでは詳細には言及しないが、これら調査成果が学術資料として積極的に活用されることを期待したい。

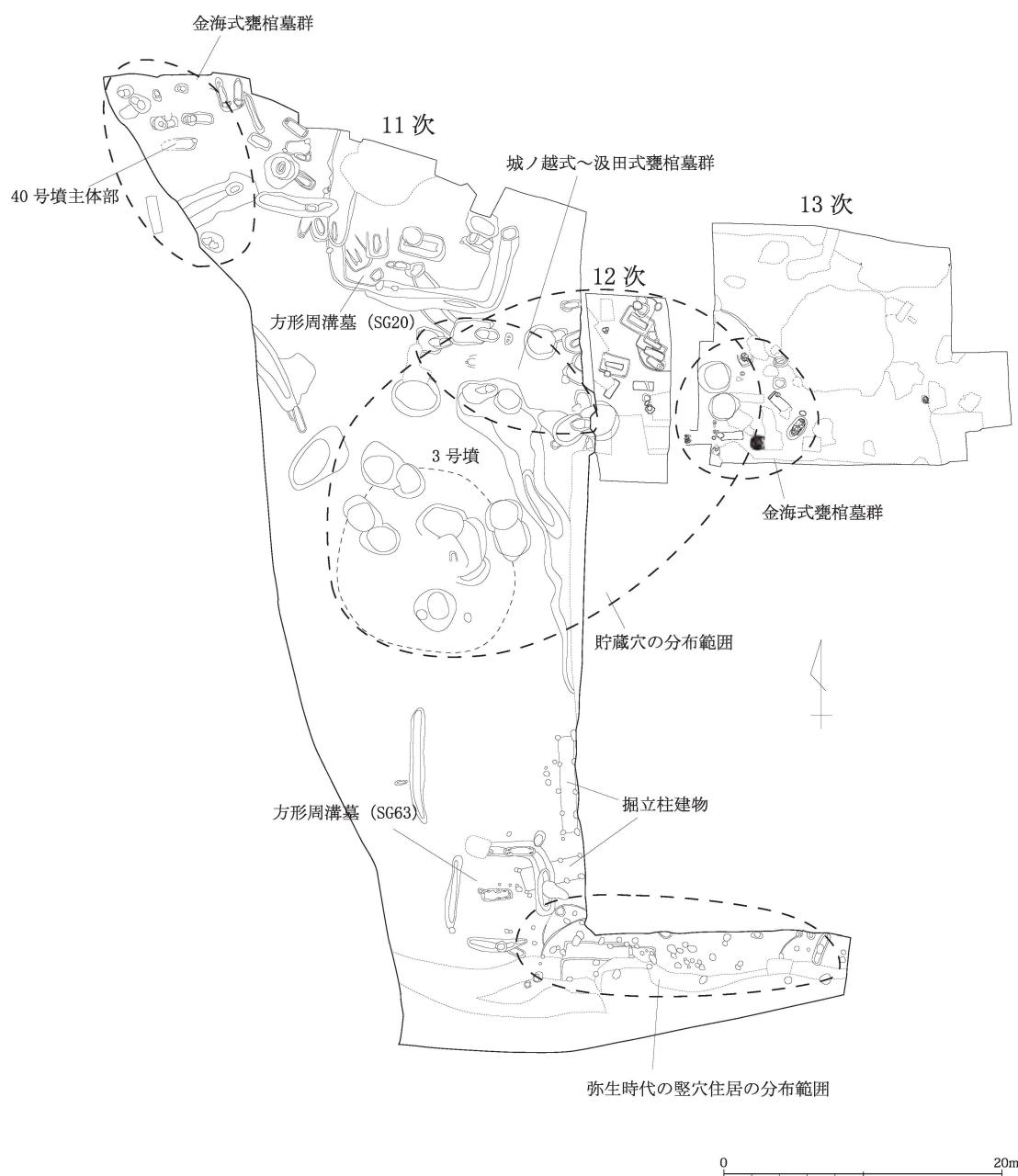


Fig27 11次調査地点・12次調査地点・13次調査地点遺構配置図 (1/500)

